

第2章 実習到達度を明確にした学校実践

第1節 授業力ベーシック評価


1. 院生のプロフィールづくり

本学の教職大学院では、入学直後のオリエンテーションにおいて一人ひとりの院生の顔写真を撮影し、その後、彼らに1分間スピーチをしてもらい、ビデオに録画してきた。現職教員院生の中には、これまで子どもたちに同様のスピーチをさせてきたが、自分がやって始めて、「限られた時間で自分を紹介するのはとても難しい」ということを実感する人も多い。とは言え、学校の先生は、総じて自分を表現することがうまい。スピーチの際に、色画用紙でキーワードを書いて、一つひとつ確認していった、最後にまとめて印象付けようとしたり、クイズ風で外見とは違う自分の意外な面を披露したりと随所に「エンターテナーだなあ」と思わせるような場面があって、その人となり幅広く知るためにとても重要な情報源になる。

学部卒のストレートマスターや社会人も「この人がこんな趣味や興味関心があったのか」と思わせるようなスピーチがあって、こちらもその院生の別の面を見た思いもして、授業で接したり、話したりする際にも参考になる。何よりも自分を言語だけではなく、動作で表現したり、ビジュアルなプレゼンテーションと創意工夫し、表現することは教師としての力量形成にとっても役立つはずである。

そして、2009（平成21）年度からは、左のサンプルのように、顔写真や1分間スピーチに加えて、入学年度、学生番号、氏名、住所、電話番号、メールアドレス、指導教員、教師像の所属、社会的活動、自己紹介を交えた「ベストワークポートフォリオ詳細」というページをネット上に載せ、その院生本人と教職大学院教員しか見ることができないようにユーザーIDとパスワードでログインするシステムを構築している。

私たち教職大学院の教員は、院生一人ひとりのこれらの背景情報を読み、そこから彼らの授業や教育実習における様子をさらに深く理解したり、共感することができ、「課題研究」のゼミの発言や様子について、入学時の1分間スピーチ

奈良教職大学院 ポートフォリオ		
入学年度 2009年 氏名(フリガナ) 奈良 太郎 (ナラ タロウ) 住所 〇×みどりmachi メール・アドレス student-a@nara-edu.ac.jp 1分間スピーチWMVファイル	ベストワークポートフォリオ 詳細 学生番号 123456 電話番号 012-345-6789 自己紹介(自分の得意、不得意も記す。) 得意なことは…… でも、……ということは不得意	長期在学 いいえ 顔写真 
選択した教師像 1. 計画者・授業者としての教師像 社会的活動 〇×市ヘルパー活動	指導教員 〇●教授	
入学直後 大学院1年次末	研究の具体的目標と達成計画 私は、〇〇の教師像を中心に学びたいです。というのは、教育実習でそれが一番欠けていると感じたからです。特に▽△の力を伸ばして、■□の問題についてもっと自信をつけて、2年後には高校の頃からの意願であった小学校教員になりたいと思っています。 前期の授業を受けた結果、自分のやりたいことは、〇〇の教師像というよりもっと子どもの実態把握を進めたいので、×□の教師像への変更希望を出し、後期は▽について特に力を入れた。しかし、学校実践Ⅲの結果、もっと根本的な力量をつけたいので、課題研究もそれにそった形に一部修正した。	

一ちを振り返って見て、「なるほど、このような思いがあったから、あのような拘りがあるのか」と思うこともしばしばある。

また、院生自身は、時間を経てから、入学時のスピーチを振り返ってみて、当初の思いと今の思いの違いや共通点を確認して、これからいかに学ぶべきかということに役立てることもできる。また、「研究の具体的目標と達成計画」を(1)入学直後、(2)大学院1年次末、(3)大学院修了時、のそれぞれの時期に箇条書きで書いてもらって、目的意識的な学びができるようにしているが、そこでも1分間スピーチが生かされることもあろう。

2. 授業力における自分の強みと弱みの確認

本学の院生たちは、一人ひとりのプロフィールの基礎データを記録した後、「授業力ベリック評価」と題する自分自身の授業力の強みと弱みをチェックし確認していく。

この発端となったのは、2008（平成20）年度に、筆者（安藤）と松井の二人の教員で「学校実践Ⅰ」及び「学校実践Ⅱ」の教育実習と並行して開講されるフィールドベースの演習科目「ポートフォリオ」の前半で、模擬授業を実施したことにある。私たちは院生を4つの班（班当たり4名～5名）に分け、各班には、少なくとも一人の現職教員院生を入れ、彼らにストレートマスターに対するメンターの役割をさせながら、班に60分間を与え、教師役を班メンバー全員で分担して他班の院生を子ども役にして模擬授業をしてもらった。題材は、教科でも特別活動や道徳でも総合的な学習でもよい。

概して、どの班も現職教員院生を軸によくまとまり、現職教員院生はストレートマスターに対してメンターの指導も行い、ストレートマスターは彼らから教材研究の段階から模擬授業までいろいろ学ぶところがあったように思われた。現職教員院生だけでなくストレートマスターも分担した10分余りの模擬授業ではかなり頑張ってやっており、予想以上に授業力がある、やはり学部の教育実習を経てきたからかもしれないという印象を抱いた。実際、それぞれの模擬授業後に下のような「模擬授業の評価表」を渡して、①指導案(5項目)、②指導案と授業の対応(2項目)、③教授スキル(7項目)、の3つに分けて、4段階

模 擬 授 業 の 評 価 表					
テーマ ()		学年 ()		項名 ()	
小・中・高等学校 いずれかに○		教科・特別活動・道徳・総合的な学習 (いずれかに○)		評価者 ()	
授業者 ()		4: 確かにそう思う		3: ややそう思う	
		2: あまりそう思わない		1: 全然そう思わない	
指導案について		✕ どの授業者かを特定して記す			
1. 授業の重点となる目標ははっきりしている。	4	3	2	1	()
2. 内容や教材の解釈は適切である。	4	3	2	1	()
3. 児童生徒の思考傾向や技能水準を考慮した指導案である。	4	3	2	1	()
4. 導入・やま場・まとめの部分がすべて含まれている。	4	3	2	1	()
5. 教材・教具の選択や配列に工夫が見られる。	4	3	2	1	()
指導案と授業の対応について					
6. 授業目標からみて実施された授業はそれに相応しかった。	4	3	2	1	()
7. 時間配分が計画と大きくずれていなかった。	4	3	2	1	()
教授スキルについて					
8. やま場の盛り上げ方がたくみであった。	4	3	2	1	()
9. 児童生徒の反応に即して授業計画を柔軟に変えた。	4	3	2	1	()
10. 児童生徒の言葉や行動に注意深く対応した。	4	3	2	1	()
11. 分かりやすい説明であった。	4	3	2	1	()
12. ポイントをついた説明であった。	4	3	2	1	()
13. 意味のよく分かる発問であった。	4	3	2	1	()
14. より深く考えるように促す発問がみられた。	4	3	2	1	()
15. ()	4	3	2	1	()
16. ()	4	3	2	1	()

の評定尺度で評価（特記したい項目にはメモを記す）させた結果、総じてうまくいったように思う。実際、私たち教員2名は、教師役と子ども役の交替で模擬授業をする各2班を担当したが、何とか授業はできるというレベルにあるのではないかという印象を持った。

しかし、第1章第2節に述べたように、1年次10月実施の「学校実践Ⅲ」において、ストレートマスター一人ひとりが免許を持っている学校種の教科で授業を行っていた様子を見ると、附属小中学校ではなく県内の公立学校であるからかもしれないが、彼らの授業力が優れているとはとても言えない、「これくらいはできているはずだ」という事柄も十分ではないという深刻な問題が顕在化し、教職大学院教員の間でその問題解決を迫られた。今から思い起こしてみると、学部の教育実習後に実施したアンケートでも実習を終えたせいぜい半数の学生が何とか教育方法の基礎程度の指導力がついたという段階にしか達していないのである。子ども理解を踏まえた授業展開までは期待できない。学部の授業実習の教育効果を踏まえて、教職大学院生の当初の授業力を捉えるべきであった。

2008（平成20）年度初めに行った授業力ベーシックの確かめのために課した模擬授業にしても、ストレートマスターは、現職教員院生の中に混じって10分程度の短時間の模擬授業をしたにすぎないから、それぞれの問題点や弱点も表面化することなく、60分の授業全体としてはうまくいったように思われたのである。

このような反省から2009（平成21）年度の模擬授業は、次頁に示すように、現職教員院生は除外して新規入学のストレートマスターや長期在学コース出身の学生（すでに中学校や高校の何らかの教科の免許状を有しており、1年間の間に小学校1種免許を取得した者）で教職大学院1回生として上がってきた学生だけで班編成をして、一人ひとりが独立した題材を使って20分間授業させることとした。子ども役は、前回と同様、院生である。たとえ20分の授業時間でも想定する授業相手が小学校の子どもなら、40分の授業になるような内容であろう。

このように院生一人ひとりに約20分の模擬授業をさせると、声が小さいとか子どもと正対して話をするというような短時間で分かるパフォーマンスだけでなく、発問の質や資料の扱い方、一人ひとりの子どもへの対応の仕方など多様な視点から強みや弱みがあぶり出されてきた。

ただし、今回の模擬授業では、班をより多く編成しなければならないために、フィールドベースの演習科目「ポートフォリオ」の担当者2人では人数が足りないので、教職大学院の教員6名が担当することとし、その後、振り返りの時間の担当者2名を加えた8名体制で実施した。そして、小学校免許取得者は、専門外の教科の中で国語か算数を選び、中学校・高等学校の免許取得者は、その教科における特定の題材をこちらが用意し、そこから何を教えるのかということを教材研究の段階から考えさせることとした。

なお、模擬授業の振り返りだけでは院生だけの問題確認に留まる可能性も高いので、教員側の指摘や理論的な説明、また基礎的な文献紹介など行うために、最終回に3コマ分の講義を盛り込んだ。そして、これらの一連の授業を「授業力ベーシック評価」と称し、2010（平成22）年度からはこれを必修科目（1単位）として現職教員院生以外全員に受講させることとした。

その際に、担当者全員で合意しながら進めた原則は、次の4つである。

原則1：この授業科目「授業力ベーシック評価」では、教員免許を持った学部卒院生及び

社会人院生の教職大学院入学時の授業力の下限の頭を揃えることを目的とする（ヘッドスタート:したがって、入試で見た以上の深いパフォーマンスを評価対象とし、各院生の問題点を大学院教員による講義やコーチングを通して自覚させ、学校実践Ⅰ及びⅡに繋げることをとする）。

原則２：模擬授業は、各自で20分間担当し、学習指導案を事前に提出する。（入試では10分のプレゼンテーションまたは10分の模擬授業をしているので、それ以上の能力を見るために20分は必要である。）

原則３：模擬授業後、教員は、授業力ベーシックの講義を行い、学部実習や初任研の参考文献だけでなく優れた実践例や有名な実践家の図書等も紹介する。（日本教育方法学会課題研究でその点の指摘有り。）

原則４：志願時点の目指す教師像の変更もありえる。また、指導教員については、メインとサブ体制をとる。

そして、模擬授業では、次頁に示すように、昨年度の授業評価表と様式は同じであるが、カテゴリーを①使命感・向上心、②児童生徒理解掌握、③授業構成、④指導内容技術、⑤評価、に改め、「追加項目」としてその他気付いた点を書いてもらう項目2つを付加して、子ども役の院生の声を幅広く捉えるようにした。

前年度との変更点のひとつは、「学校実践Ⅲ」でストレートマスターが一人で授業づくりをする過程で、困難に立ち向かい、ストレスに耐え得る力の必要性を痛感したので、①の「使命感・向上心」を加えたことである。もうひとつの変更点である⑤の「評価」は、優れた他者評価を介した自己評価ができるようになるための手立てをこの時期から身につけて、教職大学院修了後も持続的な学びを展開して欲しいと願って、付加した。そして、これらのカテゴリーが第1章第2節に紹介した授業力の評価規準でも継承されている。

授 業 力 評 価 表							
テーマ:()		班 名:()班					
授業者:()		評価者:()					
※19～22は、自己評価のみ。最下段に、22個以外の観点で評価した場合は、追加項目欄にその項目と評価等を書くこと。							
評価観点	評価項目	評価					メモ
1 使命感・向上心	教師になろうとする情熱を持っている。	5	4	3	2	1	
2	授業観察の視点を幅広く見つけることができる。	5	4	3	2	1	
3 児童生徒理解掌握	生徒理解についての知識を持っている。	5	4	3	2	1	
4	人権意識・規範意識・倫理観を身に付けている。	5	4	3	2	1	
5	様々な児童生徒の反応に対応できる指導ができる。	5	4	3	2	1	
6	児童生徒にとって学習が困難なところを理解している。	5	4	3	2	1	
7	児童生徒の実態を踏まえ、的確に指導目標を設定できる。	5	4	3	2	1	
8	児童生徒の実態を踏まえた教材分析ができ、教材選択・配列に工夫が見られる。	5	4	3	2	1	
9	授業の目的、導入、発展、結末が明確で一貫している。	5	4	3	2	1	
10	教科書の内容を解釈・分析できる。	5	4	3	2	1	
11	児童生徒の多様な発言や考え方を生かして、学習活動を展開できる。	5	4	3	2	1	
12	発言を共感的に受け止め、発言しやすい雰囲気をつくることができる。	5	4	3	2	1	
13	児童生徒一人一人の実態を把握し、意図や目的を持って指名をしている。	5	4	3	2	1	
14	発問や説明、指示は、的確でわかりやすい（声の大きさ、問のとり方、適切な言葉遣い）	5	4	3	2	1	
15	的確な（読みやすさ、正確さ、まとまり）板書ができる	5	4	3	2	1	
16	内容について概念的・論理的に理解が明確で、わかりやすく説明できる。	5	4	3	2	1	
17	声の大小、抑揚などに気をつけ、指導内容がはっきりと伝わるように話すことができる。	5	4	3	2	1	
18	授業に関する知識や技術の習得状況を指導者として自己診断できる	5	4	3	2	1	
19	他者の授業を観察し、幅広い視点から分析できる。	5	4	3	2	1	
20	観察した授業の目標と指導プロセスの関係について、適切にコメントできる。	5	4	3	2	1	
21	観察した授業について、指導技術（発問、説明、指示、板書等）の観点から分析し課題を整理できる。	5	4	3	2	1	
22	自己の授業観察の視点と見取りが妥当であったかを客観的に分析できる。	5	4	3	2	1	
追加項目							
23		5	4	3	2	1	
24		5	4	3	2	1	

最後に、「授業力ベーシック評価」の担当教員に配布したプリントから抜粋した全体スケジュールをまとめて示しておきたい。なお、模擬授業で提出する学習指導案については、グループ名、テーマ、科目名、学年、目標、準備物を記すように指示し、展開は、「教師の活動」と「予想される子どもの反応」などがあることを述べるに留めて、自由に書かせることとした。

【模擬授業のスケジュール】（該当の院生は18名を想定）

各グループは、院生3名が基本であり、最大4名までとし、6グループをつくり、各グループに一人の教員を配置する。

→最大6名の教員が必要である。

4月6日（月）入学式後・オリエンテーションの一部として

- ①授業科目「授業力ベーシック評価」のオリエンテーション（1コマ）→時間が余れば、図書館等で資料探し。

4月7日（火）

- ②午後1時～2時30分（1コマ：20分×3名＝60分 振り返りや準備時間30分）

Aグループが教師役（カメラ係、記録係等も含む）、Bグループが生徒役で模擬授業

Cグループが教師役（カメラ係、記録係等も含む）、Dグループが生徒役で模擬授業

Eグループが教師役（カメラ係、記録係等も含む）、Fグループが生徒役で模擬授業

- ③午後2時40分～4時10分（1コマ：20分×3名＝60分 振り返りや準備時間30分）

Bグループが教師役（カメラ係、記録係等も含む）、Aグループが生徒役で模擬授業

Dグループが教師役（カメラ係、記録係等も含む）、Cグループが生徒役で模擬授業

Fグループが教師役（カメラ係、記録係等も含む）、Eグループが生徒役で模擬授業

*模擬授業では、学習指導案(所定の用紙を使って)を作成し、当日最初に担当教員に提出して下さい。

*模擬授業では、教師役の振る舞いだけでなく子ども役の振る舞いも評価の対象とします。子ども役の人は、その学年にそった行動をとって下さい。

*模擬授業では、担当教員も子ども役として、質問や意見を言うことがあります。

*模擬授業の後で振り返りの時間があります。上記②③の時間は、多少の変更もあります。

*各自でどのような模擬授業ができるか考えて下さい。模擬授業だけでなく準備の様子もビデオ撮影をします。

4月8日（水）

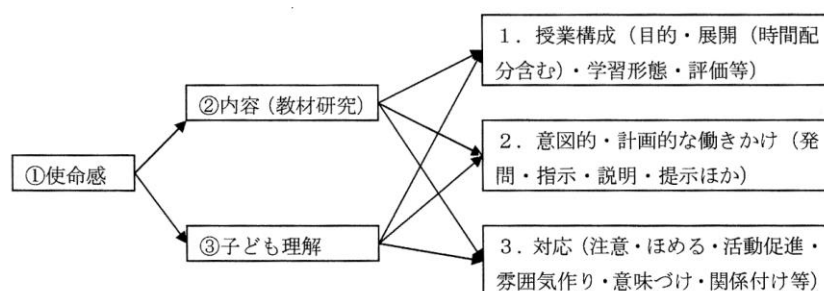
- ④模擬授業を振り返って（1コマ）

→院生各自がビデオや相互評価を基に振り返り、何ができて何が出来ていないのかを文書やビデオ等によって提出する。

4月14日（火）

- ⑤大学院教員からみた模擬授業（3コマ）

→担当教員6名が交代で（1人45分時間配当で次頁の図の右の1～3を分担）気付いたことを述べ、参考文献等を紹介する。



このように教職大学院の教員が授業力に関する異なる角度から講義を行い、適宜参考文献も紹介した後、1 コマ程度を使って、それぞれの院生が目指す教師像と指導教員の相談を行い、教師像の決定を行った。

3. 授業力ベシック評価の効果と課題

○：つけやすい、△：まあまあ、×：つけにくい							
項目	○人数	△人数	×人数	項目	○人数	△人数	×人数
1	10	2	0	12	12	0	0
2	0	5	7	13	1	11	0
3	1	8	3	14	11	1	0
4	1	7	4	15	12	0	0
5	12	0	0	16	1	6	5
6	4	7	1	17	10	2	0
7	2	6	4	18	2	4	6
8	10	2	0	19	1	10	1
9	8	4	0	20	3	7	2
10	3	9	0	21	2	9	1
11	11	1	0	22	2	7	3

さて、授業力ベシック評価の後、院生たちに「授業力評価表」について、○：つけやすい、△：まあまあ、×：つけにくい、の3点で評価をしてもらったところ、次のような結果になった。

既出の授業力評価表とそれぞれの項目の番号は対応しているが、とりわけ、10人以上がつけやすいという感想を持った項目は、次の7つである。

[使命感・向上心]

1. 教師になろうとする情熱を持っている。

[児童生徒理解掌握]

5. 様々な児童生徒の反応に対応できる指導ができる。

[授業構成]

8. 児童生徒の実態を踏まえた教材分析ができ、教材選択・配列に工夫が見られる。

[指導内容技術]

11. 児童生徒の多様な発言や考え方を生かして、学習活動を展開できる。

12. 発言を共感的に受け止め、発言しやすい雰囲気をつくることできる。

14. 発問や説明、指示は、的確でわかりやすい(声の大きさ、間のとり方、適切な言葉遣い)

15. 的確な(読みやすさ、正確さ、まとめ)板書ができる。

17. 声の大小、抑揚などに気をつけ、指導内容がはっきりと伝わるように話することができる。

また、グループの話し合いで模擬授業を振り返って「できたこと」と「課題」をストリートマスターに挙げさせたところ、次のようになった。

	AとCのグループ	BとEのグループ	CとFのグループ
できていること	<ul style="list-style-type: none"> ・専門に関わる（マニアックな）知識 ・雰囲気づくり ・子どもの意見への受け答え ・机間指導で、できていない子への対応 	<ul style="list-style-type: none"> ・熱意・情熱 ・雰囲気づくり 	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの発言の受け答え ・子どもの意見を取り入れること ・子どもの興味をひきつけるための具体物の活用 ・自分なりのねらいを持って授業を展開すること
課題	<ul style="list-style-type: none"> ・授業の一貫性（目的としていることに向けて） ・途中でずれてきたと感じても軌道修正ができない ・板書にばかり目が行く ・子どもの行動の予想 ・授業の準備不足 ・緊張とあせり ・子ども視点に立つこと ・授業の流れが強引 	<ul style="list-style-type: none"> ・授業の目的が明確でない ・目的を達成するための教材の選択と配列 ・子どもの反応を意識した教材研究 ・子どもの反応への対応 ・板書計画が練れてない ・軌道修正できない 	<ul style="list-style-type: none"> ・教材の細かい部分までを丁寧に見ていること ・子どもの意見を取り入れようとすることで授業がぶれてしまうこと ・1対1の対応へ目がむき、全体が見えなくなる ・子どもへのねらいの伝え方 ・板書（誤字、レイアウト、書き忘れ） ・授業の見通し（シミュレーションができていない）

要するに、授業力ベーシック評価の結果、入学当初からできていることは、①授業における雰囲気づくり（そのような気持はある）ができており、例えば、人によって重みの違いはあるものの、うまく授業に入る→子ども目線、うまく授業に入る→内容・教材目線、などはできるようである。そして、②子どもの意見に対する対応については、少なくとも受け入れることはできている、ということであった。

そして、入学時点での課題としては、次の4点に絞られることが明らかになった。

- a) 目的、ねらいと行動（指導）とのズレ
- b) 軌道修正が難しい → 子どもの意見や行動への対応
- c) 子どもの予想 → 事前：教材研究、授業の組み立て、子どもの意見や行動等の予想
 事中：授業中の子どもの意見や行動の意図の予想
- d) 板書計画とその遂行

以上のように、2009（平成 21）年度は、前年度の反省に基づき、より丁寧な授業力アップのための指導を行った結果、予想以上の成果を収めたように思われた。そして、小学校の観察を主とする学校実践Ⅰと中学校の観察を主とする学校実践Ⅱでは、教員免許を持っている校種の教科を 1 コマは教えるように設定し、単に傍観者的な観察になることのないようにするために、絶えず自分ならこの子どもたちをどのように指導するのかという問題意識を抱かせるようにした。

4. 授業力ベーシック評価を振り返って

確かに、2009（平成 21）年度の 4 月中旬までに実施した「授業力ベーシック評価」は、前年度より関わる教員の人数も増やし、カリキュラムも充実したので、院生に対する教育効果も大きいように思われた。院生たちは、「授業力ベーシック評価」での学びを 5 月から 6 月にかけて行う「学校実践Ⅰ」と「学校実践Ⅱ」の教育実習で結び付け、円滑な教師としての力量形成に寄与できるのではないかと期待した。結論から先に言えば、確かにそのような効果もあったが、他方、課題も見えてきた。そのことを一人の院生の学びの歩みを通して見てみよう。

「授業力ベーシック評価」において、この院生の中学歴史の「律令制度」の模擬授業を見た時、某国立大学の教員養成学部で古文書を読んで卒業論文を書いたということが示すように、歴史好きで、歴史的知識も教科書以上に詳しいことは分かるが、それをそのまま授業に持ち込んでいて、子どもにどのように興味付けをするのかという点で問題があると感じて、授業力評価表（次頁の中段左のスライド）にもその旨を記した。この授業を参観していたもう一人の教職大学院の教員からも様々な指摘があっただろうし、他の院生からも授業力評価表からいろいろな批評をもらったであろう。その結果を、この院生は、授業力評価表の根拠資料を添えながら、（１）声を出せていない、（２）導入での興味付けができていない、（３）生徒の発言に対して受け答えができていない、（４）板書が縦書きと横書きで統一されていない、という弱点があると捉えた。

この院生は、5 月の連休明けから連携協力校の小学校で「学校実践Ⅰ」、中学校で「学校実践Ⅱ」の教育実習をそれぞれ週一日行った。学校実践Ⅰ及びⅡでは、次頁の一番下左のスライドが示すように、全学年の子どもたちの様子、授業、その他の取組みを観察し、教職大学院の教員や授業者等との検討会を行い、教育実習後半で最低 1 回は自分自身で授業を行うことを課している。もちろん、この院生は、「授業力ベーシック評価」における自分の問題点を意識して、実習に取り組んだ。

そして、教職大学院のその他の授業科目と同じように、「学校実践Ⅰ」と「学校実践Ⅱ」においても、院生自身が学んだことや気付いたこと、考えたことなどをインターネット上に掲載しているデジタルポートフォリオにその都度記していった。つまり、“過程ポートフォリオ” 作りを行っていったのである。

そして、この院生は、「学校実践Ⅱ」において、事前に現職教員院生や連携協力校の教員の助けを得ながら、中学歴史の学習指導案を作成し、6 月 9 日に「第二次世界大戦」の授業を行い、その模様をビデオにも録画してもらった。その後、反省会等で参観していた他の院生たちから様々な批評をしてもらい、それらをデジタルポートフォリオに記していた。

その結果、デジタルポートフォリオに同僚の実習生や教員の批評を取り上げながら、そ

れを根拠資料として、①声を出せていた、②導入で興味付けができた、③生徒の発言に対応していた、④板書は、横書きに統一し、絵や地図をとりいれた、と成果を述べている。

授業力ベーシック評価(4月)結果

- 1, 声を出せていない。
- 2, 導入での興味付けができていない。
- 3, 生徒の発言に対して受け答えができていない。
- 4, 板書が縦書きと横書きで統一されていない。

- 1、声を出せていなかった。 Evi

2. 導入での興味付けができていない。

自信がなく話している感じで小さかった。
「大事なところ」という声も小さく感じたので強調したら分かりやすい。

追加項目

興味・関心をい
一方通行→子

板書している時に、長い間仲かになったままだった

追加項目 | けれども、そこで話を切り出すのは教師が説明し直すことになる。そして、
教師が話を切り出すか、と思ふ。 はじめ、淡々と話が續くだけで教師が説明して板書
しているだけになっていた。

授業力評価表		授業名	講義名
授業内容		授業内容	講義内容
1	授業の目的・目標	1. 授業の目的・目標	1. 授業の目的・目標
2	授業の概要	2. 授業の概要	2. 授業の概要
3	授業の進め方	3. 授業の進め方	3. 授業の進め方
4	授業の成果	4. 授業の成果	4. 授業の成果
5	授業の特色	5. 授業の特色	5. 授業の特色
6	授業の改善点	6. 授業の改善点	6. 授業の改善点
7	授業の総括	7. 授業の総括	7. 授業の総括
8	授業の感想	8. 授業の感想	8. 授業の感想
9	授業の評価	9. 授業の評価	9. 授業の評価
10	授業の改善点	10. 授業の改善点	10. 授業の改善点
11	授業の総括	11. 授業の総括	11. 授業の総括
12	授業の感想	12. 授業の感想	12. 授業の感想
13	授業の評価	13. 授業の評価	13. 授業の評価
14	授業の改善点	14. 授業の改善点	14. 授業の改善点
15	授業の総括	15. 授業の総括	15. 授業の総括
16	授業の感想	16. 授業の感想	16. 授業の感想
17	授業の評価	17. 授業の評価	17. 授業の評価
18	授業の改善点	18. 授業の改善点	18. 授業の改善点
19	授業の総括	19. 授業の総括	19. 授業の総括
20	授業の感想	20. 授業の感想	20. 授業の感想
21	授業の評価	21. 授業の評価	21. 授業の評価
22	授業の改善点	22. 授業の改善点	22. 授業の改善点
23	授業の総括	23. 授業の総括	23. 授業の総括
24	授業の感想	24. 授業の感想	24. 授業の感想
25	授業の評価	25. 授業の評価	25. 授業の評価
26	授業の改善点	26. 授業の改善点	26. 授業の改善点
27	授業の総括	27. 授業の総括	27. 授業の総括
28	授業の感想	28. 授業の感想	28. 授業の感想
29	授業の評価	29. 授業の評価	29. 授業の評価
30	授業の改善点	30. 授業の改善点	30. 授業の改善点
31	授業の総括	31. 授業の総括	31. 授業の総括
32	授業の感想	32. 授業の感想	32. 授業の感想
33	授業の評価	33. 授業の評価	33. 授業の評価
34	授業の改善点	34. 授業の改善点	34. 授業の改善点
35	授業の総括	35. 授業の総括	35. 授業の総括
36	授業の感想	36. 授業の感想	36. 授業の感想
37	授業の評価	37. 授業の評価	37. 授業の評価
38	授業の改善点	38. 授業の改善点	38. 授業の改善点
39	授業の総括	39. 授業の総括	39. 授業の総括
40	授業の感想	40. 授業の感想	40. 授業の感想
41	授業の評価	41. 授業の評価	41. 授業の評価
42	授業の改善点	42. 授業の改善点	42. 授業の改善点
43	授業の総括	43. 授業の総括	43. 授業の総括
44	授業の感想	44. 授業の感想	44. 授業の感想
45	授業の評価	45. 授業の評価	45. 授業の評価
46	授業の改善点	46. 授業の改善点	46. 授業の改善点
47	授業の総括	47. 授業の総括	47. 授業の総括
48	授業の感想	48. 授業の感想	48. 授業の感想
49	授業の評価	49. 授業の評価	49. 授業の評価
50	授業の改善点	50. 授業の改善点	50. 授業の改善点
51	授業の総括	51. 授業の総括	51. 授業の総括
52	授業の感想	52. 授業の感想	52. 授業の感想
53	授業の評価	53. 授業の評価	53. 授業の評価
54	授業の改善点	54. 授業の改善点	54. 授業の改善点
55	授業の総括	55. 授業の総括	55. 授業の総括
56	授業の感想	56. 授業の感想	56. 授業の感想
57	授業の評価	57. 授業の評価	57. 授業の評価
58	授業の改善点	58. 授業の改善点	58. 授業の改善点
59	授業の総括	59. 授業の総括	59. 授業の総括
60	授業の感想	60. 授業の感想	60. 授業の感想
61	授業の評価	61. 授業の評価	61. 授業の評価
62	授業の改善点	62. 授業の改善点	62. 授業の改善点
63	授業の総括	63. 授業の総括	63. 授業の総括
64	授業の感想	64. 授業の感想	64. 授業の感想
65	授業の評価	65. 授業の評価	65. 授業の評価
66	授業の改善点	66. 授業の改善点	66. 授業の改善点
67	授業の総括	67. 授業の総括	67. 授業の総括
68	授業の感想	68. 授業の感想	68. 授業の感想
69	授業の評価	69. 授業の評価	69. 授業の評価
70	授業の改善点	70. 授業の改善点	70. 授業の改善点
71	授業の総括	71. 授業の総括	71. 授業の総括
72	授業の感想	72. 授業の感想	72. 授業の感想
73	授業の評価	73. 授業の評価	73. 授業の評価
74	授業の改善点	74. 授業の改善点	74. 授業の改善点
75	授業の総括	75. 授業の総括	75. 授業の総括
76	授業の感想	76. 授業の感想	76. 授業の感想
77	授業の評価	77. 授業の評価	77. 授業の評価
78	授業の改善点	78. 授業の改善点	78. 授業の改善点
79	授業の総括	79. 授業の総括	7

- 4, 板書が縦書きと横書きで統一されていない。
Evi

上書き 横書きは縦書き
 柳田先生より 律令の詳細について言及明かす
 柳田先生おまじない

縦書き、横書きは統一すべき。

学校実践Ⅰ・Ⅱの内容

学校実践Ⅰ
小学校
(週1回延べ7回)
毎週木曜日

全学年の児童・生徒の様子、授業・
取り組みの様子を観察

観察した学年の担当・担任教諭との 検討会

学校実践Ⅱ
中学校
(週1回延べ7回)
毎週火曜日

院生による研究授業(原則1人1回)

デジタルポートフォリオ

日付 (必須)		カレンダーから入力	
課名/課長/所属名 (必須)	承認者	<input type="button" value="▼"/>	
部署名 (必須)	承認者	<input type="button" value="▼"/>	
フレームワーク (必須)	承認者	<input type="button" value="▼"/> 全席	
フレームワークのバージョン	承認者	<input type="button" value="▼"/> 全席	
名前 (必須)	承認者	<input type="button" value="▼"/>	
<input type="button" value="リソバ投入"/> <input type="button" value="ZOFF投入"/> <input type="button" value="番書投入"/> <input type="button" value="F7000A"/>			
大きさ	<input type="button" value="▼"/> フォント	色	<input type="button" value="▼"/>
太字	<input type="button" value="横線"/> <input type="button" value="下線"/> <input type="button" value="取消"/>	<input type="button" value="連絡"/>	



1. 声を出せていた。

2. 導入で授業の興味付けができた。 Evi

先生の社会の授業について、前日の模擬授業に比べて自信を持って授業に臨んでいたように見えた。それを見ると授業の実施経験が自信を生むのだということを感じることができた。より細かく見ていくとたくさん気づくことはあるがここでは大きく二つの点を挙げる。一つ

12:40～(4限) 社会

導入から展開までの流れが非常にスムーズで、非常に参考になった。 さんの授業を見て、教材研究の重要性、授業構成を練り上げること、そして指導案を覚えておくなくてはならないことを確認した。今回、私が授業をすることはないが少しでも吸収できるようにしたい。

○社会

導入でヒトラーの紹介では生徒全員が熱心・興味関心をもっていた。何か自分の得意な部分を授業で生かしていることも生徒の興味や関心をひきつけるのに効果的だと思った。また、生徒自身に教師のことを知ってもらうのにも有効だと思う。

※6/9ポートフォリオより抜粋

3. 生徒の発言に対して対応していた

また生徒の反応がよく、言ったことに対して様々な答えが返ってきていた。これは教師側が開かれた発問をしていたからだと思う。一文一文丁寧に問いかけをして生徒にとっても理解しやすい内容だったからこそ生徒は様々な発言をしたのだと思う。また生徒の発言を1つ1つ丁寧に答えている授業で発表しやすい雰囲気になったように思う。

(3) 教師の働きかけ

授業冒頭からの明るい笑顔や、動作「すごい」「ありがとう」「さすが」「そうやねー」という生徒との受け答えが非常に優れていたように感じる。そのようなコミュニケーション能力と「みんなの力によって、生徒との心の距離を縮めることができていた。一方的に教えたのではなく、「主発問」を投げ、生徒に考えさせる場面を作っていた部分も見習わせていただきたい。

※6/9ポートフォリオより抜粋

4. 板書は横書きに統一し、絵や地図を取り入れた。

○院生O

(2) 教材

生徒の興味・関心を引き付け、理解の促進を図るために「ヒトラーの絵」「ヨーロッパの地図」が用意されていた。既製品をそのまま用いるのではなく、使いやすくするために自分の手で作るという部分に好感が持てる。生徒は、「自分たちのためにこんなものを用意してくれたんだ！」という喜びを感じると思う。そのような教師の姿勢が生徒との信頼関係を築く要因になりえるのだろう。特に「ヨーロッパの地図」は、ドイツ勢力図(侵略の過程)を分かりやすく表すことができていた。「ジャージャー！」という掛け声とともに示した「ヨーロッパの地図」は生徒の興味・関心

○院生T

できており、内容としてはまとまったものになっていたと感じた。特に地図を用いて、時系列を追いつながりドイツの勢力の拡大を視覚化させたのはとてもよかったと感じた。しかしながら、後半

※6/9ポートフォリオより抜粋

研究授業結果

できるようになったこと

1. 声を出せていた。
2. 導入で授業の興味付けができた。
3. 生徒の発言に対して対応していた。
4. 板書は横書きに統一し、絵や地図を取り入れた。

学校実践Ⅰ・Ⅱの学び

○声の大きさ、的確な板書、声の抑揚などの指導技術に関しては、授業力ベーシック評価に比べて学校実践Ⅱの研究授業では改善が見られた。

○しかし、研究授業の後半では「元気がなくなっていた」との意見もあった。また、板書についても、教科書の太字の部分の板書しているだけになっており、板書の有用性が問われる。

また、学校実践ⅠとⅡの学びとして、声の大きさや抑揚、板書には改善が見られたが、実習後半には、エネルギー切れをおこしたのであろうか、「元気がなくなっていた」という批判の声にも真摯に耳を傾け、1年次の10月に4週間にわたって実施する「学校実践Ⅲ」では、連携協力校が抱える課題の解決に向けた組織的な取り組みに学び、授業構成の方法や学校経営の在り方を学ぶことを目的としているが、自分自身が担当する授業では、次の4点を心掛けたいと考えた。①教科書の内容を適切に理解する、②生徒に分かりやすい説明をする、③本時のねらいが分かる板書を心掛ける、④開かれた発問を考え、生徒とのやりとりで展開する授業を構築する。

このように「授業力ベーシック評価」は、「学校実践Ⅰ」と「学校実践Ⅱ」の事前評価としての役割を果たしている。院生自身は、「授業力ベーシック評価」における自らの強みと弱みを自覚しながら、目的意識的にこれらの教育実習に着手し、成果を生み出した。その過程を記したデジタルポートフォリオを振り返ることを通して、「学校実践Ⅲ」における教育実習での自分の課題も自覚できるようになった。

ただし、私がこの院生の社会科授業を参観したが、生徒の興味を引き付ける授業の難しさを再び直面した。たとえ1回や2回、子どもの興味を引き付ける授業ができたとしても、それをコンスタントに一定程度は持続できるのがプロの教師であり、その面での力量が本当に付いたと言えるのである。このように私たちの授業力は、絶えず行きつ戻りつしながら、少しずつ育成され、定着していくのではないだろうか。授業力評価規準表もそのようなことを念頭に置きながら使うべきであろう。

第2節 現職教員院生の教育実習免除の審査

1. 実習科目履修免除についての考え方

本学の実習科目（「学校実践」と称す）は、設置基準に定める10単位を上回り、4科目12単位を設定している。その内訳は、学校実践Ⅰ、Ⅱ（各2単位）、学校実践Ⅲ（4単位）、学校実践Ⅳ（4単位）である。その内、学校実践Ⅳを除く学校実践Ⅰ～Ⅲの8単位については、設置基準第29条第2項により、免除することができるとしている。

なお、学校実践Ⅰ、Ⅱ、Ⅲの到達目標に達していると判断される場合においても、自らの研究テーマをもってそれぞれの実習を希望する場合には通常通り、当該実習に参加できることとしている。また、学校実践Ⅰ、Ⅱにおいて学部卒院生が授業を行うときには、メンターとしての役割を担う意味で、学部卒院生の学習指導案の作成や授業検討など事前準備、事後の反省会などにかかわらせている。

2. 実習科目履修免除の審査の方法及び基準

本学教職大学院では、独自のカリキュラムフレームワークを作成し、その中で高度専門職としての教員に求められる水準を明示し、アセスメントベースの教育課程を編成している。そこで示している学校実践Ⅰ、Ⅱ、Ⅲの到達目標は、次の通りである。

《学校実践Ⅰ、Ⅱの到達目標》

- (1) 観察した授業の中で注目すべき場面を見出し、その事実と、自分がその場における教師だったらどのように対応するだろうか、という視点を携えた自分の意見を、口述と記述によって明確にすることができる。
- (2) 実習期間の間に、児童（生徒）が成長した点を見出し、根拠を携えてそれを口述と記述によって明確に説明できる。

《学校実践Ⅲの到達目標》

- (1) 担当教諭及び学年や分掌等の教育指導方針を理解し、組織と協働して実習に取り組むことができる。
- (2) 実践場面で遭遇した課題に対して自分が行った取り組みを、根拠と結果を明確にして省察することができる。

実習科目の履修を免除するに当たって審査の基準となるのは、この水準に到達しているかどうかであり、本学では、審査方法（課題）と認定の基準を次のように定めている。

《学校実践Ⅰに関わる審査方法と認定基準》

＜審査方法＞

- (1) 小論文（各1,200字以内）
 - Ⅰ 学校におけるある場面を提示し、自分がその場における教師だったらどのような対応をするかを記述させる。
 - Ⅱ これまでの教職経験を踏まえて、小学校の児童やクラスを想定し、その成長を促すために取り組むべきことについて考えるところを記述させる。
- (2) 提出した各自の「小論文」についてグループ討議をする。
- (3) グループ討議を経て、再度「小論文」の内容を検討し、再提出する。

＜認定基準＞

- (1) 小論文Ⅰ： 事象についての基本的認識、具体的な指導方法、論理の展開が的確であり、総合的なまとまりがあること。
- (2) 小論文Ⅱ： 事例の的確性、事例そのものの説得力、論理の展開、事例の普遍性があり総合的なまとまりがあること。
- (3) グループ討議： 言語・論理が明解であること。建設的な提案を行っていること。受容的・協調的態度であること。
- (4) 再提出論文： 初回の提出からの深まりがあること。総合的なまとまりがあること。

《学校実践Ⅱに関わる審査方法と認定基準》

＜審査方法＞

- (1) 小論文（各 1,200 字以内）
 - Ⅰ 学校におけるある場面を提示し、自分がその場における教師だったらどのような対応をするかを記述させる。
 - Ⅱ これまでの教職経験を踏まえて、中学校の生徒やクラスを想定し、その成長を促すために取り組むべきことについて考えるところを記述させる。
- (2) 提出した各自の「小論文」についてグループ討議をする。
- (3) グループ討議を経て、再度「小論文」の内容を検討し、再提出する。

＜認定基準＞

- (1) 小論文Ⅰ： 事象についての基本的認識、具体的な指導方法、論理の展開が的確であり、総合的なまとまりがあること。
- (2) 小論文Ⅱ： 事例の的確性、事例そのものの説得力、論理の展開、事例の普遍性があり総合的なまとまりがあること。
- (3) グループ討議： 言語・論理が明解であること。建設的な提案を行っていること。受容的・協調的態度であること。
- (4) 再提出論文： 初回の提出からの深まりがあること。総合的なまとまりがあること。

《学校実践Ⅲに関わる審査方法と認定基準》

＜審査方法＞

- (1) 小論文 1 題（1,200 字以内）
 - 教育現場における協働の意義を、これまでの教職経験での具体的なケースをもとに記述させる。
- (2) 提出した各自の「小論文」についてグループ討議をする。
- (3) グループ討議を経て、再度「小論文」の内容を検討し、再提出する。
- (4) プレゼンテーション（小論文の内容）
- (5) グループ討議Ⅱを実施し、そのまとめを提出する。
 - 学校教育における、設定された課題について討議をする。

(4) 模擬授業

＜認定基準＞

- (1) 小論文： 事例の的確性、事例そのものの説得力、論理の展開、事例の普遍性があり、総合的なまとまりがあること。

- (2) プレゼンテーション： 論理の展開（説得力）、言語の明確さ、話速、トーン、総合的な聞きやすさを備えていること。
- (3) グループ討議： 自らの意見をしっかりと持っていること。言語・論理が明解であること。建設的な提案を行っていること。受容的・協調的態度であること。
- (4) 模擬授業： 下の表の観点により評価

診 断 の 観 点	評価
教材の内容を解釈・分析し、その効果的な活用方法を身につけている。	
授業の目的、導入、発展、結末が明確で一貫している。	
発言を共感的に受け止め、発言しやすい雰囲気をつくることができる。	
児童生徒の多様な発言や考え方を生かして、学習活動を展開できる。	
声の大小、抑揚などに気をつけ、指導内容がはっきりと伝わるように話すことができる。	
的確で分かりやすい発問や指示ができる。	
的確な（読みやすさ、正確さ、まとまり）板書ができる。	
授業中の学習活動に関する時間配分が適切である。	
授業前と事後の評価の対比や分析を通じて、自己の授業改善の視点を整理できる。	

認定に関わる評価は、すべて A：非常に優れている B：優れている C：普通 D：不可の4段階で行う。

3. 実習科目履修免除の手順

実習科目の履修免除を希望する現職教員院生は、入学後、「実習科目履修免除願」（別紙様式1）、及び「教育・研究実績証明書」（別紙様式2）を提出し、上述の審査を受けることとなっている。

各実習科目の到達目標基準への適合の可否については、上述の審査課題について、教職大学院において定められた審査基準に基づき、専任教員3名以上で構成する審査会が審査を行い、その審査により、教職大学院会議において実習科目履修の免除について審議を行い、その審議結果に係る教務委員会の議を経て、教授会において決定することとしている。

なお、実習科目履修免除の審査方法、免除基準に関しては、教職大学院専任教員3名と学外有識者3名からなる「実習科目履修免除審査評価委員会」による評価を行い、審査の客観性を確保している。

(資料 平成 21 年度実習科目履修免除の審査に係る日程)

	内 容	時 間	時 程
4 月 6 日 (月)	○小論文(学校実践Ⅰ、Ⅱ)作成・提出 各テーマ1,200字以内 ＜テーマ＞ Ⅰ 設定場面への対応 Ⅱ 教職についての考察	(60分) (80分)	(13:00～14:00) (14:10～15:30)
4 月 7 日 (火)	○小論文1題(学校実践Ⅲ)作成・提出 ＜テーマ＞ Ⅲ 教職についての考察(1,200字以内) ○プレゼンテーション 学校実践Ⅲの小論文テーマについてプレゼンテーション(一人8分) ※ ビデオ撮影	(70分) (60分)	(13:00～14:10) (14:20～15:20)
4 月 8 日 (水)	○グループ討議Ⅰ ＜テーマ＞ ○提出した各自の小論文についてグループ討議 (全員の小論文をコピーし、配付) ○グループ討議を経て、再度小論文の内容検討 (自己評価提出)	(90分) (60分)	(13:00～14:30) (14:40～15:40)
4 月 9 日 (木)	○グループ討議Ⅱ ＜テーマ＞ ○設定課題についてグループ討議し、対応方法をまとめる。 ○各自まとめ提出	(討議50分) (まとめ70分)	(13:00～13:50) (14:00～15:10)
4 月 14 日 (火)	○模擬授業 与えられたテーマにより模擬授業＜一人30分＞ ・テーマ提示、授業構想(略案作成) 15分 ・模擬授業 10分 ・自己省察(授業後説明) 5分 ◇ 講評 ※ ビデオ撮影	(180分)	(9:00～12:00)

※ 次年度には、「録画ビデオによる授業評価」を加える予定

4. 実習科目履修免除の不可者について

上記の審査の結果、実践力の補充を行う必要があると判断された場合には、院生に課題を示し、その克服のための実習等を行う。

具体的には教員チームの指導のもと、教職大学院において事前事例演習を行い、それに基づいて、附属校において課題克服に向けた実習を行う。

実習期間は、教職大学院教員チームと付属校教員、院生の三者間で課題が克服されたと合意がなされた時点で終了とするような柔軟な仕組みとしている。

(実習科目履修免除申請関係資料 1)

(別紙様式 1)

平成 年 月 日

奈良教育大学長 殿

所 属 : 教職開発専攻 1 回生

学生番号 :

氏 名 : 印

生年月日 : 年 月 日生

実習科目履修免除願

下記のとおり、実習科目の履修を免除くださいますようお願いいたします。

記

実習科目名	免除を願う科目に○を付してください。
学校実践Ⅰ (2 単位)	
学校実践Ⅱ (2 単位)	
学校実践Ⅲ (4 単位)	

〔教職経験〕

現勤務校	
これまでの勤務校名、職名、担当学年、教科、校務の内容等の経験を記入してください。	年 月 ～ 年 月 年 月 ～ 年 月 年 月 ～ 年 月 年 月 ～ 年 月 年 月 ～ 年 月

(実習科目履修免除申請関係資料 2)

(別紙様式 2)

教 育 ・ 研 究 実 績 証 明 書

奈良教育大学

学 長 長 友 恒 人 殿

ふりがな		学 生 番 号
氏 名		

〔教育実践・研究に関わる実績とその内容を、記入例を参考に簡条書きで記入してください。〕

上記のことについて、具体的な資料に基づき記載されていることを証明します。

平成 年 月 日

所属機関名 _____

所属長氏名 _____ 印 _____

記載欄は、必要に応じて拡大してください。

■ 記入に際し、参考にしてください。

【実績例】

- (1) 学会、研究会における発表 (2) 雑誌や新聞等への投稿 (3) 校内研究会における発表
(4) その他、学校や地域等における実践的な教育活動等

【記入例】

- (1) 平成〇〇年 奈良県小学校教育指導研究会で、「学級活動の活性化」をテーマに発表した。
(2) 平成〇〇年 □□立◇◇小学校において、「外国語活動の評価に関する実践研究事業」の指定を受

け、研究チームの中核的なメンバーとして事業に取り組んだ。

(3) 平成〇〇年～平成〇〇年 □□立◇◇小学校において、地域の安全協議会の学校委員として自治会等とのコーディネーターを務めた。

(4) 平成〇〇年～平成〇〇年 □□立◇◇小学校において、第6学年の学級担任として、毎週学級通信を発行した。

(「実習科目履修免除審査評価委員会」関係資料1)

＜実習科目履修免除審査評価委員会出席依頼：県教育委員会宛＞

平成21年4月7日

奈良県教育委員会事務局

教職員課長 宛

国立大学法人奈良教育大学

学長 名

教職大学院における学校実習（「学校実践Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」）の
履修免除審査評価委員会について（依頼）

陽春の候、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。また、平素は本学の教育研究に多大のご理解・ご支援を賜っておりますことに心から感謝申し上げます。

さて、理論と実践の往還を通して教職のプロフェッショナルを養成することを目指し、昨年度開設いたしました本学教職大学院も二年目を迎え、所期の目的達成のため、本年度もより一層充実した研究・教育活動を展開する所存でございます。

そうした取組の一環として、本学では実践力の向上を目指し、学校実習として、一年次に科目「学校実践Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」を履修させることとしておりますが、現職教員については、限られた期間により幅の広い、高度な知見を得る機会を与えるため、一定の審査を経てこれらの実習の免除を行うことができるとしております。

ついては、この実習履修免除審査の在り方についてご評価をいただき、今後の取組の参考にするため、標記の委員会を下記要領で開催しますので、貴所属 ○○○○様、◇◇◇◇様 のご出席についてご配慮賜りますようお願い申し上げます。

記

期 日 平成21年4月14日（火）

時 間 15：00 ～ 17：00

場 所 奈良市高畑町

奈良教育大学 教職大学院棟 二階会議室「ひらく」

(「実習科目履修免除審査評価委員会」関係資料2)

<実習科目履修免除審査評価委員会出席依頼：依頼先大学長宛>

平成 21 年 4 月 7 日

〇〇大学
学 長 宛

国立大学法人 奈良教育大学
学 長 名

教職大学院における学校実習（「学校実践Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」）の
履修免除審査評価委員会について（依頼）

陽春の候、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。また、平素は本学の教育研究に多大のご理解・ご支援を賜っておりますことに心から感謝申し上げます。

さて、理論と実践の往還を通して教職のプロフェッショナルを養成することを目指し、昨年度開設いたしました本学教職大学院も二年目を迎え、所期の目的達成のため、本年度もより一層充実した研究・教育活動を展開する所存でございます。

そうした取組の一環として、本学では実践力の向上を目指し、学校実習として、一年次に科目「学校実践Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」を履修させることとしておりますが、現職教員については、限られた期間により幅の広い、高度な知見を得る機会を与えるため、一定の審査を経てこれらの実習の免除を行うことができますとしております。

ついては、この実習履修免除審査の在り方についてご評価をいただき、今後の取組の参考にするため、標記の委員会を下記要領で開催しますので、貴学 〇〇〇〇 教授のご出席についてご配慮賜りますようお願い申し上げます。

記

期 日 平成 21 年 4 月 14 日（火）

時 間 15：00 ～ 17：00

場 所 奈良市高畑町

奈良教育大学 教職大学院棟 二階会議室「ひらく」

(「実習科目履修免除審査評価委員会」関係資料3)

<実習科目履修免除審査評価委員会 会議次第>

奈良教育大学教職大学院
学校実習（「学校実践Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」）履修免除審査評価委員会

日 時 : 平成21年4月14日(火)

15:00～16:30

場 所 : 奈良教育大学

教職大学院棟2階「ひらく」

□ 議 題

奈良教育大学教職大学院における現職教員の〔学校実習（「学校実践Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」）〕 履修免除の審査について

<資料>

1. 現職教員院生学校実践履修免除審査日程
2. 現職教員院生の学校実践Ⅰ～Ⅲの免除審査について
3. 模擬授業テーマ
4. 学校実践Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ論文評価表（様式）
5. グループ討議評価表（様式）
6. 授業診断シート
7. 提出小論文、討議のまとめ（回収資料）
8. 教職大学院パンフレット、ニューズレター(vol.1 vol.2)

<メモ>

第3節 学校実践Ⅰ、学校実践Ⅱの進め方と成果

3-1 学校実践Ⅰ

1. 概要

(1) 目的

- 1) 小学校において、授業観察の方法（参与観察を含む）、組織的に課題解決に向かう方法を学ぶ。
- 2) 小学校の特定の学級に継続的に関わりながら、担任と共に、児童の成長、クラスの成長を支援する手立てを学ぶ。

(2) 実習による到達目標

- 1) 観察した授業の中で注目すべき場面を見出し、その事実と、自分がその場における教師だったらどのように対応するだろうか、という視点を携えた自分の意見を、口述と記述によって明確に説明することができる。

→対応するカリキュラムフレームワーク

- 1.2「目的の達成に向けた多様な教育(支援)方略を立てることができる。」
- 2.1「少なくとも1つは教科の専門性を持ち、常に最新の内容と教育方法を獲得する術（情報源の認知と情報収集の方法）を知っており、それを授業の中で発揮できる。」
- 3.1「学級の児童・生徒にカウンセリングマインドを持って接する方法や、個別の相談に応じる技法を知っており、それを計画的に学級経営や授業実践に組み込むことができる。」

- 2) 実習期間の間に、児童、学級が成長した点を見出し、根拠を携えてそれを口述と記述によって明確に説明することができる。

→対応するカリキュラムフレームワーク

- 1.3「生徒理解、生徒の学力評価、生徒指導の多様な方法（とりわけ集団作りを中心とした生徒指導）を知っており、それを授業実践に組み込むことができる。」
- 1.6「生徒、保護者、同僚にも自分の指導の方針や進め方についてわかりやすく説明できる。」
- 3.1「学級の児童・生徒にカウンセリングマインドを持って接する方法や、個別の相談に応じる技法を知っており、それを計画的に学級経営や授業実践に組み込むことができる。」

(3) 連携協力校

奈良市立都跡小学校（大橋輝雄校長）

(4) 期日

2009（平成21）年5月14日（木）～6月25日（木）の毎週木曜日、8:00～17:00

(5) 実習院生

O. K.（3年コース）、K. N.（3年コース）、H. T.（3年コース）、F. N.、Y. S.、I. A.、O. T.、S. Y.、T. K.、T. S.、Y. M.

(6) 担当大学院教員

松川利広教授、小柳和喜雄教授、宮下俊也准教授

(7) 連携協力校主担当教員

石田通大教諭

2. 実施結果

(1) 実習前における連絡・調整

実習に先立ち、以下のことを行った。

行事の名称	期日	場所	内容
第1回学校実践実習委員会	4月22日(水) 15:00～15:30	都跡小学校校長室	・実習の挨拶 ・概要の説明 ・実施要領の確認
学校実践Ⅰ・Ⅱ説明会	5月7日(木) 13:00～14:00	教職大学院講義室 すばる	・実習の説明 ・留意事項の確認 ・グループ編成 ・ビデオ等機器の貸し出し ・その他
対面式	5月11日(月) 8:30～9:00	都跡小学校体育館	・全校朝会での自己紹介
第1回連携協力校部会	5月12日(火) 16:30～17:30	都跡小学校会議室	・実習の挨拶 ・詳細の説明 ・時間割等の確認

第1回学校実践実習委員会では、大学院側の担当教員と連携協力校校長との間で、実習の概要と具体的内容の打合せを行った。そこでは特に、本年度新たに小学校免許保有者が授業を実施することを説明し同意を得た。また、連携協力校の教員による授業の観察では、①児童との関わり方について、②授業のねらいやめあてについて、③教材や教具の活用について、④板書について、⑤教室の環境について、の5点を視点に観察することを説明し同意を得た。授業以外では、朝の校門指導や休み時間、給食や清掃時における院生の関わりについて学校長よりアドバイスを受けた。

学校実践Ⅰ、Ⅱ説明会では、大学院担当教員が院生に対し概要と留意事項を説明し、授業実施院生をサポートするグループを結成した。

第1回連携協力校部会は、実習の直前に、大学院側の担当者と連携協力校校長との間で行い、詳細な打合せを行った。

(2) 実習の日程

以下の日程により実施した。

	月日	校門指導 (7:40～)	2時間目 (9:40～10:25)	3時間目 (10:45～11:30)	4時間目 (11:35～12:20)	5・6時間目 (13:50～ 15:50)	放課後 (16:00～ 17:00)
1	5/14	なし	【授業観察1】 畠山由紀美先生 4年(国語)	【授業観察2】 石田通大先生 6年(社会)	授業記録作り	院生による 授業検討	担当教員を交 えての学びの 振り返り
2	5/21	I. A. T. K.	【授業観察3】 秋葉丈子先生 3年(理科)	【授業観察4】 石田通大先生 6年(国語)			
3	5/28	O. T. Y. S.		【授業観察5】 石田通大先生 6年(学級活動)	【授業観察6】 前田伸行先生 5年(体育)	授業記録 作り・院 生による 授業検討	

4	6/4	Y. M. H. T.	【授業観察 7】 ひまわり 登り明美先生 中矢和美先生 小西智子先生	【院生授業 1】 I. A. 6 年（国語）	現職院生を交えた院生授業の検討	授業記録作り	
5	6/11	T. S. K. N.	【授業観察 8】 有井充子先生 2 年（国語）	【院生授業 2】 T. K. 6 年（社会）			
6	6/18	F. N. S. Y.	【授業観察 9】 西岡敏彦先生 （専・少人数） 4 年（算数）	【院生授業 3】 O. T. 6 年（算数）			
7	6/25	Y. M. H. T.	【授業観察 10】 軽井崇子先生 1 年（体育）	【院生授業 4】 Y. S. 6 年（理科）			

昨年度の学校実践Ⅰでは、小学校における教育実践全般を体験的に知り、授業のみならず教員の1日の業務や学校が抱える課題など、学部教育実習とは異なる視点をもって教育活動を理解することができた。しかし一方で、特にストレート院生が授業を分析したり評価したりする観点を持ち得ていない点が課題として残った。また、本年度、新たに実施した入学直後の授業実践力を確認する模擬授業においても、そのことがより明らかになった。

そこで本年度は、本教職大学院設置時に設定した、観察を主とする学校実践Ⅰの目的に加え、院生の授業実践力とその省察力の育成も目的に加えた。それに基づき、小学校教員免許保有者全員がこの実習中にそれぞれ1時間の実習授業を行うことを課した。またそれに伴い、実習授業の立案とリハーサルを全実習院生と現職教員院生及び大学院教員とで大学において自発的に行い、実習授業に臨むこととなった。また、授業後は連携協力校会議室にて、全実習院生と大学院教員とで検討会を行い（写真1）、加えてその授業を参観した連携協力校校長と教員から指導を受けた。



写真1 検討会の様子

院生の授業検討会の後、その日に観察した連携協力校教員による授業についての検討会を行った。そこではまず、授業者から授業立案から実施後までの経緯が述べられ、その後、検討会に先立ってまとめておいた授業に対する疑問等を院生から担当教員に尋ね、説明とアドバイスを受けた。最後に学校長より、その授業や授業に関わる学校の背景などの説明と指導を受けた。

授業以外の活動として、校門指導、休み時間における児童との関わり、給食指導、清掃指導を配当された学級において行った。そこで遭遇した諸問題も検討会で発表し、学級担任はどのような対処をしたか、自分が担任だったらどのような指導をしたか、といった観点で議論し、これも後に担当教員や学校長に質問し回答を得た。

これらについて、その日に学んだこととそのエビデンスとなる記録写真やビデオ記録をデジタルポートフォリオに各自が記入した。

（３）実習後における反省会・報告会

実習後、以下のことを行った。

行事の名称	期日	場所	内容
第２回連携協力校部会	６月２５日（火） １７：００～１８：００	都跡小学校 会議室	・実習の反省
第２回学校実践実習委員会	９月８日（火） １０：００～１０：３０	都跡小学校 校長室	・報告書の提出
奈良教育大学教職大学院シンポジウム 「奈良教育大学教職大学院の学校実践での学び」	９月１７日（木）	教職大学院講義室すばる	・学校実践Ⅰについての概要と結果報告 ・代表院生による学びの報告 ・その他

実習終了後、学校実践Ⅰでの学びをレポートとして課し、担当大学院教員３名で評価した。レポート課題は以下の通りである。

学校実践Ⅰで学んだことを、デジタルポートフォリオで振り返りながら、箇条書き的に示しなさい。記述は、この実践のことを知らない第三者に説明するように、分かりやすく書きなさい。

第２回連携協力校部会は、大学院側の担当教員と連携協力校校長、教頭、担当教諭、及び観察授業をした教諭によって行われた（写真２）。そこでは実習全般の成果と課題を検討した。

第２回学校実践実習委員会は、大学院側から院生がこの実習で得た学びの成果を連携協力校に報告し、今後の協力を要請した。

また、９月１７日に行われた教職大学院シンポジウム「奈良教育大学教職大学院の学校実践での学び」において、大学院教員が学校実践Ⅰの目的・方法・概要・評価の観点を、院生がそこでの学びを報告した。



写真2 第2回連携協力校部会の様子

３．結果 ー院生の学びに対する評価結果よりー

冒頭に記した学校実践Ⅰの目的及び実習による到達目標に基づき、次の３つの観点から院生の学びを評価した。

〔観点１〕「観察した授業で注目すべき場面を見出し、それに対し自分の意見を適切かつ明瞭に（第三者が読んでもわかるように）説明できているか」

…課題レポートより

〔観点２〕「学ぶ子どもや勤務する先生について注目し、それに対し自分の意見を適切かつ明瞭に（第三者が読んでもわかるように）説明できているか」

…課題レポートより

〔観点3〕「授業立案、授業実施、検討会において、積極的に取り組んでいたか」

…取り組みの状況を対象に

評価の結果、以下のことが認められた。

(1) 観点1に関わって

- ・ 院生あるいは実践校の教員の授業に対して自分の視点で評価できる点を見出せていた。
- ・ 場面を具体的かつ端的に記述することには不慣れな面が見られた。
- ・ 印象批評ではなく、理論と関係付けながら（例えば、基本文献を引用しながら）対象を自分の言葉で評価（批評・分析）する方法をもっと身に付けさせる必要がある。
- ・ なぜ自分がその場面を取り上げたのかについて説明をつけている院生と、そのまま書いている院生が見られた。
- ・ 授業力ベーシックを生かし、また、実践Ⅲに向けて体系的に自分の授業や学校を見る視点をもった院生と、そうでない院生が見られた。

(2) 観点2に関わって

- ・ 連携校教員の勤務について、見た部分については意見が述べられていたが、見えない部分の労苦など週1回の観察では限界があった。
- ・ 対象を的確に描写したり説明したりする基本スキルをもっと身に付けさせる必要がある。
- ・ 表現がうまい院生と、表現は未熟けれども取り上げている点や見ている点が一般的・抽象的ではなく、悩みながらも学んでいる院生が見られた。

(3) 観点3に関わって

- ・ 概ね積極的な取り組みの姿が見られた。
- ・ 現職員生のサポートを、メンターとしての力量形成として評価し、単位化する必要があるだろう。
- ・ 授業を評価するより確かで客観的な規準（観察の視点）を備え、自信を持って発言できる観察眼をさらに養っていく必要があるだろう。
- ・ 同期生、現職教員院生からの学びは、その後の学修活動にプラスの作用をもたらしたと言える。

4. 成果と課題

本年度よりこの学校実践Ⅰの目的に院生の授業力の向上を掲げたことには、ある程度の成果が認められた。特に事前の授業立案やリハーサルにおいては授業者本人のみならず、それをサポートするグループのメンバーや現職教員院生の努力が見られ、学習指導案の書き方や教材開発において互いにその力量の向上に貢献した。しかし、実際の授業においては具体的な指導方法や運営についてとまどいや不安が表れ、優れた授業と認められるものは少なかった。この原因には、各教科の指導内容や育成すべき学力、また、観点別評価の

趣旨等、教科の理念や内容に関わる基本的な知識の不足が挙げられる。このことは検討会において、例えば板書の仕方や指示の出し方といった方法論が理念と関連付けられていない議論になって終始してしまったことからもうかがえる。また、授業者が記したポートフォリオからも、「よい授業とは何か」という授業省察の観点が明確に自覚されていないことも判明した。これらの課題は、本教職大学院の「演習科目」にある「授業省察」や「ケーススタディ」「アクションリサーチ」などでの学びや、院生が授業実践と関わって追究される「課題研究」や「学校実践Ⅲ」「学校実践Ⅳ」での検証授業を通して解決を求めているかなければならない。

授業以外の教育活動に対する経験と学びは、朝の校門指導や休み時間での児童との関わりの中で多くのことを体得できたものと思われる。しかし、一つ一つの事例を抽象化・一般化して語ったり、対応のシミュレーションを明確に描いたりする力量は未熟であるように思われる。その克服のためには、1つの学級に入り込み、その担任教諭と共に継続して児童と関わっていくインターンの実習が必要である。その点において、この学校実践Ⅰは毎週1日の7回では不十分であることが確認された。このことを踏まえ、2010（平成22）年度では、学校実践Ⅰを2週間連続で行い、さらに実習後もスクールサポートとしてその学校に関わるができるよう、カリキュラム改善を図った。

次年度は本GPによって開発された新しい到達目標によって実施される。また、院生の入学時の授業力量を自覚させ、課題を明確にして実習への方向付けをする新科目「授業力基礎演習」も開設する。これらと学校実践Ⅰとの関係を効果的に築いていくことが今後の課題となる。

3-2 学校実践Ⅱ

1. 概要

(1) 目的

- 1) 授業観察の方法（参与観察を含む）、組織的に課題解決に向かう方法を学ぶ。
- 2) 特定の学級に継続的に関わりながら、担任とともに生徒の成長、クラスの成長を支援する手立てを学ぶ。

(2) 実習による到達目標

- 1) 観察した授業の中で注目すべき場面を見出し、その事実と、自分がその場における教師だったらどのように対応するだろうか、という視点を携えた自分の意見を、口述と記述によって明確に説明することができる。

→カリキュラムフレームワーク

- 1.2 「目的の達成に向けた多様な教育（支援）方略を立てることができる。」
- 2.1 「少なくとも1つは教科の専門性を持ち、常に最新の内容と教育方法を獲得する術（情報源の認知と情報収集の方法）を知っており、それを授業の中で発揮できる。」
- 3.1 「学級の生徒にカウンセリングマインドを持って接する方法や、個別の相談に応じる技法を知っており、それを計画的に学級経営や授業実践に組み込むことができる。」

- 2) 実習期間の間に、生徒、クラスが成長した点を見出し、根拠を携えてそれを口述と記述によって明確に説明することができる。

→カリキュラムフレームワーク

- 1.3 「生徒理解、生徒の学力評価、生徒指導の多様な方法（とりわけ集団作りを中心とした生徒指導）を知っており、それを授業実践に組み込むことができる。」
- 1.6 「生徒、保護者、同僚にも自分の指導の方針や進め方についてわかりやすく説明できる。」
- 3.1 「学級の生徒にカウンセリングマインドを持って接する方法や、個別の相談に応じる技法を知っており、それを計画的に学級経営や授業実践に組み込むことができる。」

(3) 連携協力校

奈良市立飛鳥中学校（市川 守校長）

(4) 期日

2009（平成21）年5月12日～6月23日の毎週火曜日、8:30～17:00

(5) 実習院生（10名）

O. K.（3年コース）、K. N.（3年コース）、H. T.（3年コース）、F. N.、
I. A.、O. T.、S. Y.、T. K.、T. S.、Y. M.

(6) 担当大学院教員

吉村雅仁教授、吉田明史教授、粕谷貴志准教授

(7) 連携協力校主担当教員

田中教務部長

2. 実施内容

(1) 実習前における連絡・調整

実習に先立ち、以下のことを行った。

行事の名称	期日	場所	内容
第1回学校実践実習委員会	4月10日(金) 13:30～14:40	飛鳥中学校 「校長室」	実習の概要を再説明
第2回学校実践実習委員会	4月23日(木) 15:40～16:10	飛鳥中学校 「校長室」	実習概要の詳細説明
学校実践Ⅰ・Ⅱ説明会	5月7日(木) 13:00～14:00	教職大学院 1階講義室 「すばる」	・実習の説明 ・留意事項の確認 ・グループ編成 ・ビデオ等機器の貸し出し ・その他 ※院生観察の視点は授業 省察で
第1回連携協力校部会	5月11日(月) 17:00～18:00	飛鳥中学校	授業担当者に対して、趣旨 を説明
対面式	5月12日(月) 8:30～9:00	飛鳥中学校 「職員室」	全校朝会での挨拶及び自己 紹介(院生) ※生徒とは1限生徒総会 にて対面

第1回学校実践実習委員会では、校長や職員に異動があったため大学院側の担当教員(2名)と校長、教頭、教務部長と詳細に実践の内容を説明した。特に、本年度は中学校側も授業力向上(学力向上)を掲げており、この実習の期間に新たに大学院生による授業や中学校教員による研究授業(英語の研究授業を設定)を実施することで同意できた。ただし、大学院生は中学校免許を持っている者のみを授業可能とした。

第2回学校実践実習委員会では、具体的にどの時間帯でどの教員の授業を観察するのか、大学院生はどの時期に授業を実施するのか、その打ち合わせをどのように行うのか等について綿密に打ち合わせた。院生を朝の職員打ち合わせから参加させるとともに、各クラスに配属させ、可能な限り生徒とふれあう場面を設定することとした。また、集団で授業を観察する以外に、自分の担当となったクラスの授業を観察したり、終わりの会での学力補充などに参加させることとした。

学校実践Ⅰ、Ⅱの説明会では、大学院担当教員が院生に対し概要と留意事項を説明し、授業実施院生をサポートするグループを編成した。

第1回連携協力校部会は、実習の直前に、大学院側の担当者と連携協力校の校長、教頭、教務部長及び授業担当者との間で、具体的な実践の進め方について打合せを行った。ここ

では、院生がどのような視点で授業を観察しているかを口頭で説明し、同意を得た。担当教員からは、昨年度の取組みを踏まえて、実習終了後に院生の学びについての情報提供を求められた。（このことについては、実習後にそのような会を持った。）一方、大学側からは、授業を観察する上で、学習指導案若しくは「授業観察の資料」の充実をお願いした。

（２）実習の日程

日程は、下記の表の通りである。

	月日	朝読書→1限 8:35-9:55	2限 10:05-10:55	3限 11:05-11:55	4限 12:40-1:30	5・6限 1:40-3:30	放課後 (16:00～ 17:00)
1	5/12	それぞれ担当 の学級での 授業観察 1年4学級 2年2学級 の合わせて6 学級に院生を 配置	【授業観察】 3年1組（技術） 担当：福西	【授業観察】 3年4組（英語） 担当：西川	院生による 授業検討	授 業 記 録 作 り	担当教員 を交えて の学びの 振り返り
2	5/19		【授業観察】 1年1組（国語） 担当：川井				
3	5/26		【授業観察】 2年3組（音楽） 担当：村田	【授業観察】 1年2組（理科） 担当：杉野			
4	6/2		【授業観察】 1年3組（社会） 担当：中村	【授業観察】 3年4組（英語） 担当：西川			
5	6/9		【授業観察】 2年2組（美術） 担当：北浦	【院生授業】 O. T.（英語）	【院生授業】 Y. M.（社会）	院 生 に よ る 授 業 検 討	
6	6/16		【授業観察】 3年3組（数学） 担当：藤井	【授業観察】 3年4組（英語） 担当：西川	【院生授業】 T. S.（理科）		
7	6/23		【授業観察】 2年1組（国語） 担当：中西	【研究授業】 西川（英語）	【院生授業】 K. N.（保健）		

昨年度の「学校実践Ⅱ」では、共通の授業と日替わりの授業だけを院生全員で観察し、院生を各学級に配属することはしなかった。本年度は、連携協力校と相談の上、院生が様々な学びを体験するよう可能な限り生徒と接触する機会を持つようにした。

例えば、朝の読書から1限目終了までは担当学級にいて担当教員の指導や生徒の学びを観察したり、昼食時や掃除の時間には生徒と一緒に過ごしたり、終わりの会には学校の学力補充の取り組みの支援をしながら生徒とふれあったりするなどした。これは、院生による授業を展開するに当たって、生徒との人間関係を確立すること、生徒の学びの過程を把握することが必要であったと判断したことによる取り組みであった。ただ、院生は授業だ

けでなく多くの学ぶ機会を得たが、その学びを共有する時間がなかった。

授業観察・省察に当たっては、昨年は7回のうち4回に現職院生が参加したが、本年度は、院生が授業するときだけ参加させた。これは、現職院生が参加することにより、省察の内容は深まるが、ストレート院生の発言が少なくなるとともに、基礎的なレベルでの院生同士の情報の共有ができなかったことによる。

しかし、現職院生のよき指導力も必要と考え、大学院内でおこなう院生の模擬授業（連携協力校での授業に向けた練習）では、現職院生がメンターとしての役割を果たせるような機会をつくった。現職院生にとってはハードな支援であったが、ストレート院生の授業力向上に一定の効果があつた。

放課後の連携協力校の担当教員（授業担当教員のみ）を交えた検討会では、主として授業についての検討になったが、授業の方法についての意見交換が中心となっていて、教材や指導内容についての質問は少なかった。また、院生は、授業以外にも様々な場面で生徒とふれあっていたが、授業外の学びについて発表する院生も少なかった。実践的な指導力を持つための学びにはまだ至っていない状況であった。これらのことについては、院生がその日に学んだことをエビデンスとなる情報を付けて記述するデジタルポートフォリオからうかがえる。

（３）実習後における反省会・報告会

行事の名称	期日	場所	内容
第2回連携協力校部会	8月21日（金） 15:30～16:30	飛鳥中学校 図書室	実践のまとめ 参会者 ・中学校側：校長、実践担当教諭6名 ・大学側：院生、吉村雅仁、吉田明史
奈良教育大学教職大学院シンポジウム	9月17日（木）	教職大学院 講義室すばる	・「学校実践Ⅱ」についての概要と結果報告 ・代表院生による学びの報告 ・その他

第2回の連携協力校部会では、まず、院生からこの「学校実践Ⅱ」で学んだことを発表させた。院生からは、次のような学びについての報告があつた。

- （ア）ルール作りの大切さ
- （イ）職朝での連絡の際、伝達力・説明力の必要性
- （ウ）授業に関して：発問の仕方など多くの指導技術を学べた
- （エ）職員会議に出席でき、現場の雰囲気を感じた
- （オ）院生の授業実践に関して
- （カ）放課後の検討会に関して：授業担当の先生から直接話をうかがえた
- （キ）部活動も見えたかった
- （ク）実際の先生がたの「1日」を見たかった

また、連携協力校の教員からは、実践の展開に関して、主に次のようなコメントがあつた。（※は、大学側の説明である。）

- ・ 2年間の大学院プログラムにおける実践の目的がはっきりわからなかった。

※授業とそれ以外を総合的に観察することが当初の目的だが、院生の実態が想定していたものとは異なっていたため目標設定が変化せざるを得なかった。

- ・ 授業観察の観点を学校側に知らせてほしい。職員側も対応が困難である。
- ・ 実践が毎週 1 回では、職員とも生徒とも人間関係が作りにくい。連続して実施したほうが良いのではないか。
- ・ 院生の授業レベルに差がある。実践力（生徒指導力）をいかにつけるかが課題ではないか。
- ・ 連携協力校として、もっと本時の指導案等も詳しくしたかったが、時間的に観察資料程度が限度である。
- ・ 授業実践は 2 年目に試すのも良いかも。院生が自分独自の良い授業を見せてほしい。

また、9 月 17 日に行われた教職大学院シンポジウム「奈良教育大学教職大学院の学校実践での学び」においては、大学院教員が「学校実践Ⅱ」の目的・方法・概要・評価の観点を、院生がそこでの学びを報告した。

3. 評価等

実習終了後、「学校実践Ⅱ」での学びをレポートとして課し、担当大学院教員 3 名で評価した。レポート課題は、評価の観点とともに示した。以下の通りである。

『学校実践Ⅱ』で学んだことを、デジタルポートフォリオ で振り返りながら、それぞれ箇条書き的に示しなさい。（記述は、この実践のことを知らない第三者に説明するように、分かりやすく書きなさい）」

観点 1:「観察した授業で注目すべき場面を見出し、それに対し自分の意見を適切かつ明瞭（第三者が読んでもわかる）に説明できているか」

観点 2:「学ぶ子どもや勤務する先生について注目し、それに対し自分の意見を適切かつ明瞭（第三者が読んでもわかる）に説明できているか」

具体的な評価は次のようにした。

ア) レポート

- ・ 観察した授業で注目すべき場面を見出し、それに対し自分の意見を適切かつ明瞭（第三者が読んでもわかる）に説明できているか（20 点）
- ・ 学ぶ子どもや勤務する先生について注目し、それに対し自分の意見を適切かつ明瞭（第三者が読んでもわかる）に説明できているか（20 点）

イ) 実践

授業立案、授業実施、検討会において、積極的に取り組んでいたか。（10 点）

これらを 3 人の担当者がそれぞれ 50 点満点で採点し、合計を 100 点満点に換算した。

評価の結果、以下のことが認められた。

① レポート観点1に関わって

- ・場面を具体的かつ端的に記述することには不慣れな面が見られた。
- ・印象批評ではなく、理論と関係づけながら（例えば、基本文献を引用しながら）対象を自分の言葉で評価（批評・分析）する方法をもっと身に付けさせる必要がある。
- ・内容よりは方法に着目したコメントが多く見られた。

② レポート観点2に関わって

- ・連携校教員の勤務について、ほとんど見えていない状況であった。院生の積極性が見られないこと、限られた時間での接触であったことなどが影響している。

③ 観点3に関わって

- ・教科の内容が専門的になってくると、意見を述べられない院生がいる。
- ・免許を持たない院生が、自分ならこうしたいという思いがあまり生まれない。
- ・模擬授業で成長した部分もあるが、教科の内容になると専門外の院生はグループでの協議が難しいようである。
- ・現職院生のサポートを、メンターとしての力量形成として評価し、単位化する必要がある。
- ・授業を評価するより確かで客観的な規準（観察の視点）を備え、自信を持って発言できる観察眼をさらに養っていく必要がある。（どちらかといえば、授業方法に着眼することになる）

4. 今後の課題

- ・週1回から、1週間連続（毎日）型への検討。
- ・模擬授業の在り方
開始時期、検討グループの編成、サポート体制の在り方。
- ・院生がもっている免許教科の授業は必ず見せる方向で考えるべき。
- ・学校が提供する指導案の質を高めるべき。
- ・この科目の到達目標と到達基準を明確化すること。
- ・レポートなどを書かせて、授業評価や省察の視点の確実な把握が必要。

第4節 学校実践Ⅲの進め方と成果

1. 2009(平成21)年度の学校実践Ⅲ

この年度の学校実践Ⅲの目的及び目標は以下の通りである。

目的

- 学校実践Ⅰ、Ⅱで学んだことを基に、連携協力校における課題解決のために自らが実践者となり、学校が抱える課題の解決に向けた組織的な取り組みに学び、授業構築の方法や学校運営のあり方を理解する。
- 教師として様々な課題に組織的に対応していける素地を身につける。(出来事の予測、指導の見通し、緊急時の対応・処置など)
- 授業実践を含む、自分自身の教育活動の質の向上を図り、教師として絶えず成長していける能力を高める。

目標

- 担当教諭及び学年や分掌等の教育指導方針を理解し、組織と共同して実習に取り組むことができる。
- 自分の授業実践や、授業内外で遭遇した課題に対して行った取り組みを、根拠と結果を明確にして省察することができる。

これらの目的や目標を設定した意図は、学校実践Ⅰ、Ⅱにおける参与観察を踏まえて、学校の中での教師としての動きに関わって包括的に体験、振り返りをさせようとするものであった。学部実習のように授業実践を中心にするのではなく、学校教育場面で遭遇する様々な場面に対して問題意識を持ち、それぞれの場面で組織の一員としてどのように対応をしていくことができるのかを主な活動内容としていたのである。しかしながら、実習中の院生の様々な側面について振り返ることにより、まず授業の力量を大幅に高めなければならないことが合意された。

2. 学校実践Ⅲの指針

認可申請の関係もあり、基本的な目的や目標を大幅に変えることはできないが、初年度である2008(平成20)年度の反省点を踏まえ、上記の目的及び目標の中でも「授業実践」を最重視することとした。具体的な方策としては、まず、各院生最低10時間以上の授業実践を連携協力校へ依頼し、院生の事前指導においても彼らにその旨を伝え、それぞれ授業実践を重視する意識を高めた。また、大学院教員の訪問指導(検討会)においても、遭遇場面とその対応だけでなく、院生の授業実践の振り返りを中心とする方針とした。そして、初年度の遭遇場面振り返りのためのシート、本学カリキュラムフレームワークに基づく評価票に加えて、授業実践の振り返りのための評価票を作成した。

3. 授業評価票及びその運用

図1は、作成された評価票である。この評価票の項目は、本学の授業力ベーシック、学校実践Ⅰ、学校実践Ⅱにおいて作成された評価規準を取捨選択したものである。今年度は、学校実践Ⅲで院生の授業評価を実施するのは初めてであるため、これは暫定的な規準となる。

実 習 生 評 価 票 1 (実習生授業用)

※評価は、「4: 確かにそう思う、3: ややそう思う、2: あまりそう思わない、1: 全くそう思わない、—: 評価該当場面なし」で行う。

授業に関して(授業実践時に主にご記入ください)

(授業実践時) 教科・領域等: () 授業実施学年: () 実習生: ()
2009年10月()日 評価者: ()

評価観点	評価項目	評価	メモ
1	学習指導要領の趣旨を踏まえ、指導内容の教育的価値を明確にできる。	4 3 2 1 —	
2	授業中の学習活動に関する時間配分が適切である	4 3 2 1 —	
3	授業の目的、導入、発展、結末が明確で一貫している。	4 3 2 1 —	
4	単元全体の構成や学習過程の構成を工夫し、指導計画を立てることができる。	4 3 2 1 —	
5	単元全体を通した、適切なプリント・ワークシート、資料等を準備できる。	4 3 2 1 —	
6	発問や板書、予想される児童生徒の反応等を視野に入れた細案を作成できる。	4 3 2 1 —	
7	板書計画を作成できる	4 3 2 1 —	
8	児童生徒にとって学習が困難なところを理解している。	4 3 2 1 —	
9	児童生徒の実態を踏まえ、的確に指導目標を設定できる。	4 3 2 1 —	
10	児童生徒の実態を踏まえた教材分析ができる。	4 3 2 1 —	
11	一斉、グループ、個別といった学習形態を目的や状況に応じて活用している	4 3 2 1 —	
12	教科書の内容を解釈・分析し、その効果的な活用方法を身につけている。	4 3 2 1 —	
13	掲示資料、配付資料の内容、提示方法について理解し、資料を効果的に活用できる。	4 3 2 1 —	
14	声の大小、抑揚などに気をつけ、指導内容がはっきりと伝わるように話すことができる。	4 3 2 1 —	
15	情報技術・機器を活用できる。	4 3 2 1 —	
16	的確な(読みやすさ、正確さ、まとまり)板書ができる	4 3 2 1 —	
17	内容について概念的な理解が明確で、わかりやすく説明できる。	4 3 2 1 —	
18	ノート指導の書き方や整理のしかたについて指導でき、コメントのあり方を理解している。	4 3 2 1 —	
19	学習形態に合わせた支援を机間指導等を通して、適切に行うことができる。	4 3 2 1 —	
20	児童生徒の多様な発言や考え方を生かして、学習活動を展開できる。	4 3 2 1 —	
21	児童生徒一人一人の実態を把握し、意図や目的を持って指名をしている	4 3 2 1 —	
22	発言を共感的に受け止め、発言しやすい雰囲気をつくることできる。	4 3 2 1 —	
23	発問や説明、指示は、的確でわかりやすい(声の大きさ、間のとり方、適切な言葉遣い)	4 3 2 1 —	
24	学習指導と評価の一体化のあり方について実践を通じて理解している。	4 3 2 1 —	
25	指導目標に沿った評価問題を作成することができる。	4 3 2 1 —	
追加項目		4 3 2 1	
		4 3 2 1	
		4 3 2 1	

コメント

図 1 学校実践Ⅲにおける授業評価票

この評価票の運用に関しては、連携協力校の担当教諭に対し、院生の実習の前半、中盤、後半それぞれ一回ずつ、合計3時間分の授業評価を依頼した。担当教諭の指導上の負担を考えたためである。

4. 成果

(1) 院生の授業に関わる評価

この専門職院 GP（実習到達度を明確にした実践的指導と評価法）の観点から考えると、学校実践Ⅲに関わって暫定的に作成された授業評価規準が、①適切に評価できる項目で構成されているかどうか(評価できない項目や挙げられている以外に評価すべき項目の有無)、②院生の担当教員が使いやすいものとなっているかどうかを確認する必要がある。しかしながら、今年度については、実習期間中に台風接近による臨時休業や新型インフルエンザによる学級・学年・学校閉鎖が相次ぎ、10回の授業実践の確保自体も困難な状況であり、院生によっては授業評価が1回程度しかできない場合もあった。従って、担当教員が実際に評価を行った事例の絶対数が少なく、量的な資料を基に述べることはできない。そこで、実習前半、中盤、後半と、大学の要望通りに評価が行われた院生の事例を見ながら、①、②の点を確認してみたい。

図2、3、4はそれぞれ院生Aの担当教諭から提出された実習前半(図2)、中盤(図3)、後半(図4)の授業評価票である。

授業に関して(授業実践時に主にご記入ください)							
(授業実践時) 教科・領域等:() 授業実施学年() 実習生:() 2009年10月() 日 評価者:()							
評価 観点	評価項目	評価				メモ	
1	授業 構成	学習指導要領の趣旨を踏まえ、指導内容の教育的価値を明確にできる。	4	③	2	1	—
2		授業中の学習活動に関する時間配分が適切である	4	③	2	1	—
3		授業の目的、導入、発展、結末が明確で一貫している。	4	③	2	1	—
4		単元全体の構成や学習過程の構成を工夫し、指導計画を立てることができる。	4	③	2	1	—
5		単元全体を通した、適切なプリント・ワークシート、資料等を準備できる。	4	3	②	1	—
6		発問や板書、予想される児童生徒の反応等を視野に入れた細案を作成できる。	4	③	2	1	—
7		板書計画を作成できる	4	③	2	1	—
8		児童生徒にとって学習が困難なところを理解している。	4	③	2	1	—
9		児童生徒の実態を踏まえ、的確に指導目標を設定できる。	4	③	2	1	—
10		児童生徒の実態を踏まえた教材分析ができる。	4	③	2	1	—
11	指導 内容 技術	一斉、グループ、個別といった学習形態を目的や状況に応じて活用している	4	3	2	1	—
12		教科書の内容を解釈・分析し、その効果的な活用方法を身につけている。	4	③	2	1	—
13		掲示資料、配付資料の内容、提示方法について理解し、資料を効果的に活用できる。	4	3	2	1	—
14		声の大小、抑揚などに気をつけ、指導内容がはっきりと伝わるように話すことができる。	4	③	2	1	—
15		情報技術・機器を活用できる。	4	3	2	1	—
16		的確な(読みやすさ、正確さ、まとめ)板書ができる	4	③	2	1	—
17		内容について概念的・論理的な理解が明確で、わかりやすく説明できる。	4	③	2	1	—
18		ノート指導の書き方や整理のしかたについて指導でき、コメントのあり方を理解している。	4	3	②	1	—
19		学習形態に合わせた支援を机間指導等を通して、適切に行うことができる。	4	③	2	1	—
20		児童生徒の多様な発言や考え方を生かして、学習活動を展開できる。	4	3	②	1	—
21		児童生徒一人一人の実態を把握し、意図や目的を持って指名をしている	4	③	2	1	—
22		発言を共感的に受け止め、発言しやすい雰囲気をつくることできる。	4	③	2	1	—
23		発問や説明、指示は、的確でわかりやすい(声の大きさ、間のとり方、適切な言葉遣い)	4	③	2	1	—
24		学習 評価	指導と評価の一体化のあり方について実践を通じて理解している。	4	3	2	1
25	指導目標に沿った評価問題を作成することができる。	4	3	2	1	—	
追加項目		4	3	2	1		
		4	3	2	1		
		4	3	2	1		

図2 実習前半の授業評価票

授業に関して(授業実践時に主にご記入ください)

(授業実践時) 教科・領域等: (算 数) 授業実施学年 (5) 実習生: ()
 2009年10月 (14) 日 評価者: ()

評価 観点	評価項目	評価	メモ
授業 構成	1 学習指導要領の趣旨を踏まえ、指導内容の教育的価値を明確にできる。	4 ③ 2 1 —	
	2 授業中の学習活動に関する時間配分が適切である	④ 3 2 1 —	
	3 授業の目的、導入、発展、結末が明確で一貫している。	4 ③ 2 1 —	
	4 単元全体の構成や学習過程の構成を工夫し、指導計画を立てることができる。	4 ③ 2 1 —	
	5 単元全体を通した、適切なプリント・ワークシート、資料等を準備できる。	4 3 ② 1 —	
	6 発問や板書、予想される児童生徒の反応等を視野に入れた細案を作成できる。	4 3 ② 1 —	
	7 板書計画を作成できる	4 ③ 2 1 —	
	8 児童生徒にとって学習が困難なところを理解している。	4 ③ 2 1 —	
	9 児童生徒の実態を踏まえ、的確に指導目標を設定できる。	4 ③ 2 1 —	
	10 児童生徒の実態を踏まえた教材分析ができる。	4 ③ 2 1 —	
指導 内容 技術	11 一斉、グループ、個別といった学習形態を目的や状況に応じて活用している	4 3 ② 1 —	
	12 教科書の内容を解釈・分析し、その効果的な活用方法を身につけている。	4 ③ 2 1 —	
	13 掲示資料、配付資料の内容、提示方法について理解し、資料を効果的に活用できる。	4 ③ 2 1 —	
	14 声の大小、抑揚などに気をつけ、指導内容がはっきりと伝わるように話すことができる。	4 ③ 2 1 —	
	15 情報技術・機器を活用できる。	4 3 2 1 ①	
	16 的確な(読みやすさ、正確さ、まとまり)板書ができる	4 ③ 2 1 —	
	17 内容について概念的理解が明確で、わかりやすく説明できる。	4 ③ 2 1 —	
	18 ノート指導の書き方や整理のしかたについて指導でき、コメントのあり方を理解している	4 3 ② 1 —	
	19 学習形態に合わせた支援を仲間指導等を通して、適切に行うことができる。	4 ③ 2 1 —	
	20 児童生徒の多様な発言や考え方を生かして、学習活動を展開できる。	4 ③ 2 1 —	
	21 児童生徒一人一人の実態を把握し、意図や目的を持って指名をしている	4 ③ 2 1 —	
	22 発言を共感的に受け止め、発言しやすい雰囲気をつくることができる。	4 ③ 2 1 —	
	23 発問や説明、指示は、的確でわかりやすい(声の大きさ、間のとり方、適切な言葉遣い)	4 ③ 2 1 —	
学習 評価	24 指導と評価の一体化のあり方について実践を通じて理解している。	4 3 2 1 ①	
	25 指導目標に沿った評価問題を作成することができる。	4 3 2 1 ①	
追加項目		4 3 2 1	
		4 3 2 1	
		4 3 2 1	

図3 実習中盤の授業評価票

授業に関して(授業実践時に主にご記入ください)						
(授業実践時)教科・領域等:(算数) 授業実施学年(5) 実習生:() 2009年10月(28)日 評価者:()						
評価 観点	評価項目	評価				メモ
授業 構成	1 学習指導要領の趣旨を踏まえ、指導内容の教育的価値を明確にできる。	4	(3)	2	1	—
	2 授業中の学習活動に関する時間配分が適切である	(4)	3	2	1	—
	3 授業の目的、導入、発展、結末が明確で一貫している。	4	(3)	2	1	—
	4 単元全体の構成や学習過程の構成を工夫し、指導計画を立てることができる。	4	(3)	2	1	—
	5 単元全体を通した、適切なプリント・ワークシート、資料等を準備できる。	4	(3)	2	1	—
	6 発問や板書、予想される児童生徒の反応等を視野に入れた細案を作成できる。	4	3	(2)	1	—
	7 板書計画を作成できる	4	(3)	2	1	—
	8 児童生徒にとって学習が困難なところを理解している。	4	(3)	2	1	—
	9 児童生徒の実態を踏まえ、的確に指導目標を設定できる。	4	(3)	2	1	—
	10 児童生徒の実態を踏まえた教材分析ができる。	4	(3)	2	1	—
指導 内容 技術	11 一斉、グループ、個別といった学習形態を目的や状況に応じて活用している	4	3	(2)	1	—
	12 教科書の内容を解釈・分析し、その効果的な活用方法を身につけている。	4	(3)	2	1	—
	13 掲示資料、配付資料の内容、提示方法について理解し、資料を効果的に活用できる。	4	(3)	2	1	—
	14 声の大小、抑揚などに気をつけ、指導内容がはっきりと伝わるように話すことができる。	4	(3)	2	1	—
	15 情報技術・機器を活用できる。	4	3	(2)	1	—
	16 的確な(読みやすさ、正確さ、まとまり)板書ができる	4	(3)	2	1	—
	17 内容について概念的理解が明確で、わかりやすく説明できる。	4	(3)	2	1	—
	18 ノート指導の書き方や整理のしかたについて指導でき、コメントのあり方を理解している	4	3	(2)	1	—
	19 学習形態に合わせた支援を机間指導等を通して、適切に行うことができる。	4	(3)	2	1	—
	20 児童生徒の多様な発言や考え方を生かして、学習活動を展開できる。	4	(3)	2	1	—
学習 評価	21 児童生徒一人一人の実態を把握し、意図や目的を持って指名をしている	(4)	3	2	1	—
	22 発言を共感的に受け止め、発言しやすい雰囲気をつくることができる。	4	(3)	2	1	—
	23 発問や説明、指示は、的確でわかりやすい(声の大きさ、間のとり方、適切な言葉遣い)	4	(3)	2	1	—
	24 指導と評価の一体化のあり方について実践を通じて理解している。	4	(3)	2	1	—
	25 指導目標に沿った評価問題を作成することができる。	4	(3)	2	1	—
追加項目		4	3	2	1	
		4	3	2	1	
		4	3	2	1	

図4 実習後半の授業評価票

これらの評価票からわかることが三つある。第一に、いずれの評価票も追加項目が記載されていないことから、これらの項目が授業を評価する上で充分であったことが窺える。もちろんこれら三つの評価は同じ担当教諭が行っているため、「この担当教諭にとっては」という条件付きではある。しかし、45分(小学校)や50分(中学校)の授業を評価する際に、余り細かい評価観点を示しても、評価者の負担が増えるだけであり、数の点ではこの程度が適正ではないかと思われる。第二に、評価票に挙げられた項目の中に、評価できないものすなわち余分な項目が含まれているかどうかという点に関しても、特に不要な項目はないと判断して良いと考えられる。図2、図3において、いくつかの項目に「—」(評価該当場面無し)が付けられているが、図4においては「—」はなくなっている。これは、当該院生が各授業で行った活動内容や方法によって、評価項目として機能することを意味している。第三に、図2、3、4と順を追って評価点数を眺めてみると、後半になるほど院生の授業評価が向上していることがわかる。つまり担当教諭から見て、この院生の授業能力が向上しているということである。以上のことから、この評価票の項目はいずれも院生の授業評価をする上で適切であり、上記①の観点は満たすものと言える。

さらに、上記②に関しては、多数の教員の意見が得られないため明確にはわからないものの、特に使い難いという意見が担当教諭から出なかったことを踏まえると、分量的にも内容的にもそれほど無理のある評価票ではないと言うことができよう。

(2) 授業外も含めた評価に関して

当初の目的、目標にあるとおり、学校実践Ⅲの元々の内容は、授業に限定するものではなく、教員としての教育活動全体を包括するものである。それを評価する手立てとして、我々は本学教職大学院のカリキュラムフレームワークのいくつかの項目を含む基準を想定していた。今年度、授業実践を中心とする方針で臨みはしたが、授業以外も含めた院生の資質能力評価も図5の項目に基づき各協力校で行ってもらった。図5は上記院生Aの配属校から提出されたものである。

授業やその他全般に関して(カリキュラム・フレームワーク項目を含む)気付いた時に記入ください。
(最終週でも結構です。)

評価観点	評価項目	評価	メモ
1 使命感向上	担任との連携の在り方について知っている。	4 3 2 1 —	
2	保護者、地域との連携の在り方について知っている。	4 3 2 1 —	
3 児童生徒理解掌握	様々な教授・学習活動で児童生徒の秩序を保つことができる。	4 3 2 1 —	
4	様々な児童生徒の反応に対応できる多様な指導の仕方を知っている。	4 3 2 1 —	
5	児童生徒同士の関係性を構築する学級経営(学年経営)の仕方を知っている。	4 3 2 1 —	
6	児童生徒が落ち着いて学習に集中できる教室環境について知っている。	4 3 2 1 —	
カリキュラム・フレームワーク項目			
7	生徒、保護者、同僚にも自分の指導の方針や進め方についてわかりやすく説明できる。		
8	対児童・生徒	4 3 2 1 —	
9	対保護者	4 3 2 1 —	
10	対同僚	4 3 2 1 —	
11	質の高い、使いやすい教材を開発できる。	4 3 2 1 —	
12	また開発の方法を言語化でき、それを同僚に説明・紹介できる。	4 3 2 1 —	
13	何らかの生徒指導上の諸問題で話し合う必要が生じた保護者と話し合いで解決していく様子がうかがえる。 (学校職員として)組織的に対応していく様子が見られる。 (例えば、学校へ保護者が来た場合等に担当教諭の対応についてあとから質問したり、話し合う様子が見られることなど)	4 3 2 1 —	
14	成果をあげている実践や研究成果などの情報を集め、校内や校外へ発信できる。(例えば、最近の指導法理論や、新しい教材を、同僚に紹介する場面が見られるなど)	4 3 2 1 —	

追加項目	4 3 2 1
	4 3 2 1
	4 3 2 1

総評(コメント)

(個人情報の関係で、この部分は削除しています)

図5 実習生評価票(授業外も含めた評価)

この評価票からもわかる通り、院生の授業評価以外に我々が設定した「使命感や向上心」「児童生徒理解・掌握」の項目は評価が可能であったものの、カリキュラムフレームワークから選んだ評価項目に関してはいずれも「―」（評価該当場面無し）が含まれている。つまり、我々が学校実践Ⅲで想定したカリキュラムフレームワーク項目が不適切であったことを示している。特に、保護者対応に関わることは実習中にはほとんど出来ないという事実、また研究成果を院生が発信することはほとんど不可能であるという現実を今後の課題とする必要がある。

第5節 学校実践Ⅳの進め方と成果（現職教員院生以外の場合）

1. 学校実践Ⅳ（現職教員以外の院生の場合）の概要

（1）学校実践Ⅳの目的・到達目標

学校実践Ⅳは、「院生の研究テーマにそった総合実習」と位置づけられており、現職教員院生以外の院生も各自が設定したテーマにそって実践的な研究を行うことになっている。

具体的な目的と達成目標は、各院生に配布されている「奈良教育大学教職大学院アセスメント・ガイドブック」に明示されている。

アセスメント・ガイドブックより抜粋

目的：

「自ら設定したテーマにそって学校実践を行い、実践研究の力量を培う」

実習による到達目標：

- ①自分の実践を、これまで学んだ諸理論と結びつけて分析的に省察することができる。
- ②実習期間中における自分の実践の変容を、明確に自覚し、説明することができる。

（2）学校実践Ⅳの進め方

事前指導

事前指導にあたっては、目的を再確認し、実習の内容と具体的な進め方、評価等についての指導をおこなっている。

現職教員以外の院生にとっては、学校実践Ⅳの目的として設定されている実践研究の力量を高める課題に加えて、学校実践Ⅲで明らかになった授業の実践力に関する課題にも取り組めるようにテーマを設定させている。授業実践力については、事前指導の中で、授業力ベーシック評価の成果を受けて作成した「授業実践報告票」を用いて、到達目標と評価の観点を明示した。また、実践研究の力量については、昨年度からすすめてきている「課題研究」の指導をもとにして、それぞれの研究計画にもとづいて進めるように指導をしている。

事前指導の内容については、以下の1～8に示す。

1 目的

「自ら設定したテーマにそって学校実践を行い、実践研究の力量を培う」

到達目標①自分の実践を、これまで学んだ諸理論と結びつけて分析的に省察することができる。

到達目標②実習期間中における自分の実践の変容を、明確に自覚し、説明することができる。

2 実習内容

設定したテーマにもとづく実習計画により実施する。詳細は、院生、教職大学院担当教員、配属校の協議により決定する。

3 時期、期間

ストレート院生は、10月に集中しておこなうことを原則とする。

実習期間については、事前に院生および教職大学院担当教員が具体的な実施計画とともに配属校（勤務校）に説明する。

4 配属について

ストレート院生は、テーマに応じて連携協力校でおこなう。

5 実施手順

（実習の方法）

各自決定した研究テーマにそって総合実習に入る。担当教諭の補助をおこないながら、研究テーマに基づく取組に対して適宜担当教諭および教職大学院担当教員から助言を受ける。

（実習の記録）

院生は、学校実践Ⅳの活動について、その概要と時間を「実習記録簿」に記録して、教職大学院

担当教員の確認を受ける。
院生は、自らの実践の具体と、それがこれまでに学んだ諸理論とどう対応しているかを、毎日ポートフォリオに記述する。

(指導体制)

研究テーマに基づく取り組み及びその省察に対しては、適宜、教職大学院担当教員および担当教諭から助言を受ける。

(成果の発表)

研究テーマについて、実習によって学んだ成果を、研究成果報告会で発表する(2009/11/19)。
連携協力校の教員だけでなく、市町村教育委員会、保護者、地域住民、教科等研究会の会員など外部からの参加者も募り、評価を仰ぐ機会とする。

6 実習に関わる指導

(訪問指導)

教職大学院担当教員(2名)は、適宜学校を訪問して、院生の達成状況を把握し指導する。
その際、放課後などに1時間程度の院生との(現職院生以外は担当教諭も含め)協議の場を持つ。
教職大学院担当教員の訪問指導にあたっての詳細は、配属校の実態に合わせ、院生、指導担当教員の協議により決定する。

(IT等を活用した指導)

デジタル・ポートフォリオ、メール、テレビ会議システム等を活用した指導を行う。

(教職大学院棟での指導)

訪問、ITを活用した指導の他に、大学院での面接指導の機会を設定する。

7 評価

実習終了後、院生は、実習期間中における自分の実践の変容を、口述と記述によって説明する。大学院指導担当教員は、その結果をもって、院生、連携協力校担当者と協議の上、単位の認定と評価を行う。

ポートフォリオの作成

学校実践Ⅳの概要(学校に関する基本情報、特定の学級や児童生徒の特徴、教育実践の前後の説明の後、どのような働きかけをして成果を生み出したのか、指導の分析、その学問的意味づけ等)を別紙として添えて、それぞれのページは、ローマ数字で打っておくこと。

根拠となる資料の整理(文書、DVD等)

※ポートフォリオはデジタル化(文書はワードや一太郎、映像はファイル)して保管しておく

8 その他

(実習記録簿について)

実習時間の管理は、デジタル・ポートフォリオ等と実習記録簿によっておこなう。

院生は、学校実践に該当する活動をしたときは、「実習記録簿」用紙に実施日時、時間、概要を記入し、実習校の担当者および教職大学院担当教員に報告する。あわせて担当教諭より受けた指導についての記録をおこなう。

実習中の指導

実習中の指導については、教職大学院の担当教員と連携協力校の指導担当教員でおこなっている。具体的には、それぞれの院生について2～3名の教職大学院担当教員と数名の連携協力校の指導担当教員が指導にあたる体制をとった。教職大学院担当教員は、週1～3回程度連携協力校に出向き、院生の授業の参観および助言、連携協力校指導担当教員を交えての協議をおこなった。

指導については、院生のテーマ、連携協力校の実態に応じて、時間設定や内容を決め、柔軟な指導体制がとれるようにしている。例えば、連携協力校での実習を終えた後、夜の時間帯に教職大学院棟に来て指導を受けることや、デジタル・ポートフォリオの書き込みによって、Web上で担当教員のコメントを得ることなどである。

今年度の5人のストレート院生の指導体制は以下の通りである。

	連携協力校	大学院指導教員	学校実践Ⅳ指導担当教員	連携協力校指導教員
院生1	天理市立朝和小学校	吉村、松川	吉村、松川、植西	校長、教頭、所属学級担

				任
院生 2	天理市立朝和小学校	粕谷、植西	吉村、松川、植西	校長、教頭、所属学級担任
院生 3	生駒市立北小学校	池島、吉田（明）	池島、粕谷、吉田（誠）	校長、教頭、所属学級担任
院生 4	生駒市立北小学校	粕谷、吉田（誠）	池島、粕谷、吉田（誠）	校長、教頭、所属学級担任
院生 5	生駒市立南中学校	小柳、粕谷	小柳、安藤	校長、教頭、教科担任、所属学級担任

なお、学校実践Ⅳ教職大学院担当教員には、課題研究の指導を担当する教員が少なくとも一人は入り、学校実践Ⅳの指導担当教員以外にも、研究授業等の際には必要に応じて連携協力校を訪問して指導をおこなっている。また、院生からの要望に応じて訪問指導の他に教職大学院の研究室で指導を受ける機会を保障している。

実習でおこなった授業については、全てビデオカメラで記録され、実習中の指導においては、それらの映像を見ながらの授業検討も行うことができるようにしている。

事後指導

事後指導では、授業の実践力と実践研究の力量の形成の二つの観点から指導がおこなわれている。

授業の実践力については、「授業報告票」の作成の指導を通しておこなわれる。具体的には、実習中の授業実践について、連携協力校での指導で指摘された点や自ら気づいた改善点について、各院生が持ち寄り、実際の授業記録ビデオを見ながら、さらに必要な視点について学びあう活動を設定している。その上で、各院生は事後指導において得られた視点も含めて、再度、自分の実践記録を振り返り、授業報告票の作成と根拠資料とする授業記録映像の編集をおこなう。

実践研究の力量の形成については、「課題研究」の指導をとおしておこなわれている。具体的には、それぞれの指導教員の指導のもと、学校実践Ⅳでおこなわれた実践研究についての分析と考察を進める形である。

以上の指導の後に、院生の学びの成果は、学校実践Ⅳ報告会で発表される。学校実践Ⅳ報告会には、教職大学院教員と連携協力校指導担当教員が参加し、発表と実習期間を振り返ってコメントをもらうことにしている。

平成 21 年 10 月 28 日

〇〇市立〇〇〇〇学校
校長 〇〇 〇〇 様

奈良教育大学 大学院教育学研究科
専門職学位課程（教職大学院）長 安藤輝次

学校実践Ⅳ報告会及び学校実践実習委員会への出席について（依頼）

秋冷の候、ますます御健勝のこととお慶び申し上げます。平素は格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。

本学教職大学院の実習（学校実践Ⅳ）では、貴校において本学大学院生たちが、それぞれ多くのことを学ばせていただきました。校長をはじめ諸先生方から多大なご支援、ご指導をいただいた賜と、教職大学院教員一同心より感謝しております。

この度、各協力校における彼らの学びをお世話になった先生方に報告する会と、今回の実習に関する各

協力校の声を聞き今後の実習に生かすための実習委員会とを以下の日程で開催することにいたしました。
つきましては、貴校から校長先生並びに実習生をご担当いただいた先生に、公務ご多用のところ恐縮ですが、両会にご出席賜りますようお願い申し上げます。

日時：平成 21 年 11 月 19 日（木曜日）

午後 3 時～午後 5 時（報告会終了後、実習委員会）

場所：奈良教育大学教職大学院棟 1 階演習室

内容：

1. 各大学院生から学校実践Ⅳにおける具体的な成果の発表（報告会）
2. 各連携協力校から実践Ⅳに関する感想、要望、課題を発表いただき、今後の進め方等の協議（実習委員会）

可能であれば、各校の学校実践Ⅳ（期間、方法、実習生）に関する意見をとりまとめてご参加いただければ幸いです。またご出席いただく先生方の旅費はこちらで負担します。

各院生の報告会の発表

タイトルは以下の通りである。

院生 1	外国人児童と日本人児童とを結ぶ多言語活動の実践と学び
院生 2	学校実践Ⅳでの学び
院生 3	既存の集団の特性を活かした授業づくり －小学校社会科における問題解決学習の実践－
院生 4	理科におけるメタ認知能力の育成 －学校実践Ⅳの学びを通して－
院生 5	学校実践Ⅳにおける体感を通して理解を深める教材の開発と実践

2. 学校実践Ⅳ（現職教員以外の院生の場合）到達目標について

（1）現職教員以外の院生の到達目標についての考え方

学校実践Ⅳにおける到達目標の設定については、まず現職教員院生と現職教員以外の院生の目標を分ける議論があった。これは、開設 1 年目の学校実践Ⅲにおいて現職教員以外の院生の授業実践力の低さが課題となったためである。現職教員以外の院生の到達目標の設定は、「第一に授業の基礎基本を知っているだけではなく、パフォーマンスとしても表現でき、第二に子ども対応にも適切な配慮がなされているようなレベルを目指すこととする。具体的には、初任者研修の最低限のレベルを超えており、しかも、教科指導では特定の単元で、生徒指導は、特定の事例についての何らかの解決をもたらしたという根拠資料が提出できることを到達目標とする」という議論の結果にもとづいている。

一方、現職教員以外の院生の授業実践力については、開設 2 年目に、1 年次の院生を対象に授業力ベーシックの試行が行われ、授業の実践力の向上を図ると同時に、現職教員以外の院生に必要な授業実践力の検討が行われた。その結果、①授業構成（目的・展開・学習形態・評価等）、②意図的・計画的なはたらきかけ（発問・指示・説明・提示等）、③対応（注意・ほめる・活動促進・雰囲気作り・意味づけ・関係づけ等）の 3 つが抽出された。

このような経緯を経て、現職教員以外の院生の授業実践力の到達目標は作成された。

（２）授業実践の力量の到達目標

学校実践Ⅳ 授業実践力評価観点

項目	評価の観点
授業構成 （教材研究・構成）	教材の価値や指導の意義等の理解と児童生徒の実態の把握にもとづいて、 <ul style="list-style-type: none"> 適切にねらいや目標を設定した。 授業の構成（課題設定、学習形態、進行、場面、時間配分等）を工夫した。 教材教具（資料、ワークシート、実物教材、実験器具等）を選択／開発した。 児童生徒の学習上のつまずきを予測し適切な対応を準備した。
授業展開 （はたらきかけ・対応）	指導性の確保、学習規律の維持、学習活動に集中できる環境をつくり出すために、 <ul style="list-style-type: none"> 児童生徒の実態に応じて、意図的、計画的なはたらきかけ（発問、指示、説明、提示等）の工夫をした。 児童生徒の実態に応じて、対応（注意、賞賛、活動の促進、雰囲気づくり等）の工夫をした。 <p>児童生徒の興味関心、意欲、思考力、問題解決能力、表現力、学習の技能、知識理解等の形成のために、</p> <ul style="list-style-type: none"> 児童生徒の実態に応じて、意図的、計画的なはたらきかけ（発問、指示、説明、提示等）の工夫をした。 児童生徒の実態に応じて、対応（注意、賞賛、活動の促進、雰囲気づくり等）の工夫をした。 <p>話し合いや教え合い等の相互的な学習活動を促進するために、</p> <ul style="list-style-type: none"> 児童生徒の実態に応じて、意図的、計画的なはたらきかけ（発問、指示、説明、提示等）の工夫をした。 児童生徒の実態に応じて、対応（注意、賞賛、活動の促進、雰囲気づくり等）の工夫をした。 <p>予測される児童生徒の学習のつまずきに対応するために、</p> <ul style="list-style-type: none"> 児童生徒の実態に応じて、意図的、計画的なはたらきかけ（発問、指示、説明、提示等）の工夫をした。 児童生徒の実態に応じて、対応（注意、賞賛、活動の促進、雰囲気づくり等）の工夫をした。
学習評価	児童生徒の学習成果について評価する多様な手法（観察、提出物・作品、テスト等）をもっており、授業の内容や評価の目的、児童生徒の実態に応じて実施した。
授業評価	学習評価の結果や授業記録にもとづいて、指導の成果と課題を整理でき、具体的な授業改善の方法を見いだすことができた。

（３）授業実践力の評価

授業実践報告票

授業実践力の評価は、院生が記述した授業実践報告票と該当する力量の根拠資料となる授業場面の映像によって行われた。以下に、①院生が記入した授業実践報告票の様式、②授業実践報告票作成にあたって使用した授業実践力キー・クエスチョン・シートを示す。

①学校実践Ⅳ 授業実践報告票（様式）

項目	記述内容	
授業構成	<ul style="list-style-type: none"> 教材（価値、意義等） 構成（目的、学習形態、進行、場面、時間配分等）の工夫 <p>どのように考えて、どのように計画したか。</p>	
授業展開	<ul style="list-style-type: none"> 意図的、計画的なはたらきかけ（発問、指示、説明、提示等）の工夫 児童生徒への対応（注意、賞賛、活動の促進、雰囲気づくり等）の工夫 <p>どのように考えて、どのように実践したか。</p>	
学習評価	<ul style="list-style-type: none"> 児童生徒の学習の成果についての評価の工夫 <p>どのように考えて、どのように</p>	

	実施したか。	
授業評価	授業の、成果と課題、改善策。	

②学校実践Ⅳ 授業報告票作成のためのキー・クエスチョン

授業構成	<p>「教材の価値や指導の意義の理解と児童生徒の実態把握にもとづいて、どのように授業のねらいや目標の設定を工夫しましたか？」</p> <p>「教材の価値や指導の意義の理解と児童生徒の実態把握にもとづいて、どのように授業構成（課題設定、学習形態、進行、場面、時間配分等を工夫しましたか？」</p> <p>「教材の価値や指導の意義の理解と児童生徒の実態把握にもとづいて、どのような教材教具（資料、紙板書、ワークシート、実物教材、実験器具等）を選択／開発しましたか？」</p> <p>「教材の価値や指導の意義の理解と児童生徒の実態把握にもとづいて、どのように児童生徒の学習上のつまずきを予測し適切な対応を準備しましたか？」</p>
授業展開	<p>「指導性の確保、学習規律の維持など、児童生徒が学習活動に集中する環境をつくり出す（維持）するために、どのような意図的、計画的なはたらきかけや対応をおこないましたか？」</p> <p>「児童生徒の興味、関心や意欲を引き出すために、どのような意図的、計画的なはたらきかけや対応をおこないましたか？」</p> <p>「児童生徒の思考力、問題解決能力を高めるために、どのような意図的、計画的なはたらきかけや対応をおこないましたか？」</p> <p>「児童生徒の表現力、学習の技能等を高めるために、どのような意図的、計画的なはたらきかけや対応をおこないましたか？」</p> <p>「児童生徒の知識理解の形成のために、どのような意図的、計画的なはたらきかけや対応をおこないましたか？」</p> <p>「話し合いや教え合い等の相互的な学習活動を促進するために、どのような意図的、計画的なはたらきかけや対応をおこないましたか？」</p> <p>「予測される児童生徒の学習活動のつまずきに対応するために、どのような意図的、計画的なはたらきかけや対応をおこないましたか？」</p>
学習評価	「授業の内容や目的、児童生徒の実態に応じて、どのような児童生徒の学習を評価するための工夫（観察、提出物・作品、テスト等）をおこないましたか？」
授業評価	「学習評価の結果や授業記録にもとづいて、指導の成果と課題を整理し、どのような授業改善の方法を見いだしましたか？」

授業実践報告票の事例

以下は、一人の院生が提出した授業実践報告票の事例である。

授業実践報告票（院生報告事例）

項目	記述内容	
授業構成	<p>・教材（価値、意義等）</p> <p>・構成（目的、学習形態、進行、場面、時間配分等）の工夫</p> <p>どのように考えて、どのように計画したか。</p>	<p>（教材）</p> <ul style="list-style-type: none"> 教材の価値を明確にして授業計画を作成できるように、教科書その他に、指導書、授業に関する参考書の授業案も参考にしながら、必要な価値や授業のアイデアを収集した。 指示をタイミング良く的確にできるように、台詞を書き入れた細案を作成し、何度も授業をシミュレーションしながら洗練する作業を行った。 板書計画を作成し、児童の状況を予想しながら授業をシミュレーションしながら、洗練する作業を行った。 児童の思考を引き出す発問をするために、補助発問と主発問を明確にし、児童の反応を予想しながら授業をシミュレーションしながら、言葉を洗練する作業を行った。 学習活動が明確になるようなワークシートを準備した。 「貧しい人は美しい」という言葉の意味を考えさせることで、込められた思いや思想にふれさせることを意図した。 <p>（構成）</p> <ul style="list-style-type: none"> 児童が関わりながら活動する場面を設定することや各自の授業への参加を意図して、グループで教材の文章を読み合う活動（まる

		<p>読み)を導入に取り入れた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習過程の定型(自分の意見を記入→グループで意見交流→友だちの良い意見をメモ→自分の意見を記入)を活用して習慣づけを行った。 ・自分の意見を発表させた後に、友だちの良い意見をメモさせる活動を取り入れ、他者の良いところを見つける活動を取り入れることで、各自の意見の広がりや深まりを狙うとともに、発表した児童が承認される場面を構成した。 ・プリントを配るときに係を活用して(集配長)役割交流をさせた。
授業展開	<ul style="list-style-type: none"> ・意図的、計画的なはたらしかけ(発問、指示、説明、提示等)の工夫 ・児童生徒への対応(注意、賞賛、活動の促進、雰囲気づくり等)の工夫 <p>どのように考えて、どのように実践したか。</p>	<p>(発問)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童の思考を本時の学習に方向付け、学習意欲を喚起するために、前時の内容を問う発問を行った。 <p>(指示)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・活動に入らせる前に、活動後の指示を明確に行った(「書けたら鉛筆を置いてください」)。 ・教師の主導の時間であることを意識付けること、指示の徹底を図ることのために、指示の前に「顔を上げてください」と指示して、全員がそろったことを確認してから指示を出した。 ・指示の理解が遅い児童への配慮のため、学習の流れを説明するときに、言葉で説明するだけでなく紙板書で示した。 ・一度で指示を飲み込めない児童への配慮のため、指示の紙板書はそのまま残して学習の流れがいつでも確認できるようにした。 ・延長された時間に活動を終えている児童にも指示を行った。 ・次の活動に移る前にも、授業の流れの説明に使った紙板書を示して、活動が明確になるように指示をした。 <p>(提示)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全員が本時の課題を明確に意識できるように、課題を読み上げるとともに板書(紙板書)した。 <p>(注意)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・活動に入る前に、注意してほしいことをあらかじめ伝えて(定型の言い方を使うこと)、活動の方向付けをした。 ・グループ活動中に、姿勢の崩れている児童に注意をすることや、活動の様子を把握して、進んでいない児童に指示をするなど、活動の維持促進のはたらしかけを行った。 ・授業の終了時には、机をグループの形から通常の形にもどして、集中を作り直してから、次時の指示をした。 <p>(雰囲気づくり)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業に入る前に、児童に話しかけてリレーションを形成する、また緊張をほぐすための働きかけを行った。 ・質問をした児童に対して丁寧に対応し、わからないときは質問しても良いというメッセージを全体に伝えた。 <p>(活動の促進)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童の注意を喚起するために「みえますか?」と声かけを行った。 ・考えさせる発問(主発問)によって、自分の考えをワークシートに書く活動に入る前に、補助発問を用いて、児童に発表させ、意欲付けをおこなうと同時につまずきが予想される児童にもヒントが得られるようにした。 ・活動させている間に、配慮が必要な児童への援助を行った。 ・児童の活動を保障するために、「まだ時間がほしい人は手を挙げてください」と指示して、状況を把握して時間の延長を行った。 ・発表や意見表明の定型「わたしは、ぼくは、〇〇は～という意味だと思います。なぜならば――だからです。」を示して、方法の指導をするとともに、つまずきがちな児童もスムーズに活動に入れるように配慮した。 ・グループ内の発表の際に、「班長さんから反時計回り」と具体的な指示をして、役割を明確にして活動に入らせるようにした。

		<ul style="list-style-type: none"> ・プリントを配るときに係を活用して（集配長）役割交流をさせた。
学習評価	<ul style="list-style-type: none"> ・児童生徒の学習の成果についての評価の工夫 どのように考えて、どのように実施したか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学習の進行状況、達成状況を把握するために、ワークシートを集めて評価した。 ・前時までの学びを本時に生かすため、本時の学びを次時以降に生かすために、ワークシートをファイリングさせた。
授業評価	授業の、成果と課題、改善策。	<p>(構成)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・上学年、また前学年までの学習事項とのかかわりを明らかにして、あらかじめ学習内容の価値の発展に備えたり、学習の系統性に配慮したりすることが必要であった。 ・遊び時間との区別をつけさせ、学習に向かわせる構えをつくるために、授業に入るときの挨拶をさせることが必要。担当教諭がいさつなしで授業をしているため、それを踏襲したのだが、あいさつに代わるはたらきかけ(担当教諭は黙想を児童にさせる)が必要であった。 <p>(教材)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ワークシートを修正する必要がある。「友達の意見のいいところ」の欄とともに「その理由」という欄を作った。これは「友達の意見をいいと思った理由」を書くべきか「友達の意見のもととなる理由」を書くべきか、児童は混乱してしまっていた。そのため、授業内で児童から何度か質問を受け、児童の思考の流れを遮ることもつながってしまった。理由も友達から参考にしてほしいと考えたため、後者を書かせるつもりだったのだが、それならば「友達の意見のもととなる理由」というような表記にしなければならなかった。 <p>(指示)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・活動に向けて児童が動き始めてからでは指示が通りにくいため、児童が動き始める前に何をするかを指示しておく。(グループにする →指示 × 指示 → グループ ○) ・漫然と児童が活動することを避けるために、活動させる前に、学習にかかわる教師の意図が達成されるように指示をしておく(漫然と意図のない活動をさせない)。 <p>(提示)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・前時までの学習を振り返るための紙板書や掲示物(単元計画)などが必要であった。学習の記録(ワークシート)はあったが、ほとんどを教師が管理していたため、児童に持たせ、振り返らせる必要があった。 ・後ろの席の児童も読み取れるように、紙板書の字は小さくなりすぎないようにする。 ・児童の注意を拡散させないように、紙板書の表に目立つ磁石を付けず、裏面にゴム磁石等を使用する。 <p>(注意)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・遊び時間との区別をつけさせ、学習に向かわせる構えをつくるために、姿勢、教科書やノートなどの学習準備を揃えるはたらきかけが必要。 ・学習活動への集中を促すためや終了時間のバラツキを少なくするために、活動の前には、時間枠を提示してから活動に入らせる。(音読や書く活動の際に) ・姿勢のことや学ぶときの構えなどは、その都度注意しなくても良いように、できるだけ授業の早い段階で、児童が納得する理由も説明しながら指導をしておく。(例：机の上に肘をつく姿勢はいけない。身体が左に傾くため、正しく字を書くことができなくなる) 「名前書いたら鉛筆置いて、椅子引いて背筋伸ばして」の指示は常にセットにする。そのことで教師から次の指示・説明があることをわからせる。 <p>(賞賛)</p>

		<ul style="list-style-type: none"> ・机間巡視のときに、メモをするなど児童の記述内容を把握する。それが賞賛することにつながったり、他の児童へのモデルの提示やそれに伴う活動の促進へつながったりする。 ・拍手が起きた際にも、一度止めて注目させる。拍手をしたグループは承認感を得られ、他の児童はそれを真似たり、越えようとしたりする。 <p>(活動の促進)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・意図した活動ができているかどうかを把握し、沈滞しているところに介入するために、机間巡視をおこなう。 ・取りかかりが困難である児童に活動の手がかりを与えるために、意図した活動ができている児童（グループ）を取り上げて、学級全体に紹介し、良さを広げるはたらきかけをする。個人の書く活動の際には、一度途中でとめて、子どもの考えから例示する。（早くできている子がいたら、それを全体に教え、手がかりとしての視点を提示の子に与えたり、よりよい意見を書かせるための競争心をあおったりする。） ・お互いが競い合って高まる活動（練り合い）に導くために、良い活動や発言をした児童（グループ）を取り上げて全体に投げかける。実態によっては、良い言葉を取り上げて褒めたら、それを越えようとする児童が出てくる。 <p>(進行のデザイン)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童の思考過程がスムーズに流れるように、授業のはじめに本時の課題把握をさせてから、授業の課題解決のための活動になるように授業進行を工夫する。課題把握→音読 音読をする際に、なぜその部分を音読するか、今日の授業ですることと音読とのつながりを説明すべきであった。児童にとっても教師にとっても目的がない。目的なく音読をさせているため、教師は聞こうとしていない。課題のための音読であれば、児童も何を気にして音読すべきかが明確になる。 ・できるだけ指示しなければならないことを減らしていくために、可能なことは習慣化するようにする（プリントが配られたら、名前を書く。名前を書き終わったら鉛筆を置いて、椅子を引いて前を向く。姿勢を正して指示を聞く体制をつくる）。 <p>(場面のデザイン)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本時の課題を児童全員に把握させるために、一斉に読ませるなどの具体的な活動を入れる。また勉強することに気持ちを持って行かせる。 ・グループ内での役割が毎時間同じになってしまっている。役割が固定してしまい、活動を促進するためあまりグループの活動に入っていない子をつくらないようにするために役割を輪番にする必要があった。 ・事故やトラブルを防ぐために、プリントや資料などを配るときには、順番に一方通行で取りに来られるようにする。 <p>(発言の取り上げ)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中位から下位の児童が発言しないでも過ぎていくことが当たり前にならないように、発問後に挙手が少ないときは、指名して答えさせることを待つようにする。 ・全体に考えさせるために、指名して答えた児童の発言が教師の意図した内容に沿ったことであっても、「そうですね」とは言わず、「そうなの？」と返す。他の児童にも考えさせる機会を作ったり、考えの広がりを狙ったりする。 <p>(その他)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教師の言葉の影響（ヒドウンカリキュラム）を考慮して、「少し」「ちょっと」などの言葉に気をつける。自分の準備に自信がないとそうなり得る。
--	--	---

（４）学校実践Ⅳの到達目標と評価

現職教員以外の院生の学校実践Ⅳの到達目標は、先に述べた授業実践力に関する到達目標である「学校実践Ⅳ 授業実践力評価観点」および、当初から目標に設定されている実践研究の力量に関する到達目標の２つの観点が設定された。

評価にあたっては、上記の２つの観点の下位項目ごとに評価を行い、その上で総合的な評価を行う方法を採用した。

学校実践Ⅳについての評価票は以下の通りである。

2009年度 学校実践Ⅳ 評価票（現職教員以外の院生）

目的：自ら設定したテーマにそって学校実践を行い、実践研究の力量を培う。
 実習による到達目標： ①自分の実践を、これまでに学んだ諸理論と結び付けて分析的に省察することができる。
 ②実習期間中における自分の実践の変容を、明確に自覚し、説明することができる。
 「アセスメント・ガイドブック 4-39(2009)」より

授業実践の力量に関する評価

授業構成	<p>教材の価値や指導の意義等の理解と児童生徒の実態の把握にもとづいて、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 適切にねらいや目標を設定できる。 ・ 授業の構成（課題設定、学習形態、進行、場面、時間配分等）を工夫できる。 ・ 教材教具（資料、ワークシート、実物教材、実験器具等）を選択／開発できる。 ・ 児童生徒の学習上のつまずきを予測し適切な対応を準備できる。 	A—B—C—D
授業展開	<p>指導性の確保、学習規律の維持、学習活動に集中できる環境をつくり出すために、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 児童生徒の実態に応じて、意図的、計画的なはたらきかけ（発問、指示、説明、提示等）の工夫ができる。 ・ 児童生徒の実態に応じて、対応（注意、賞賛、活動の促進、雰囲気づくり等）の工夫ができる。 <p>児童生徒の興味関心、意欲、思考力、問題解決能力、表現力、学習の技能、知識理解等の形成のために、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 児童生徒の実態に応じて、意図的、計画的なはたらきかけ（発問、指示、説明、提示等）の工夫ができる。 ・ 児童生徒の実態に応じて、対応（注意、賞賛、活動の促進、雰囲気づくり等）の工夫ができる。 <p>話し合いや教え合い等の相互的な学習活動を促進するために、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 児童生徒の実態に応じて、意図的、計画的なはたらきかけ（発問、指示、説明、提示等）の工夫ができる。 ・ 児童生徒の実態に応じて、対応（注意、賞賛、活動の促進、雰囲気づくり等）の工夫ができる。 <p>予測される児童生徒の学習のつまずきに対応するために、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 児童生徒の実態に応じて、意図的、計画的なはたらきかけ（発問、指示、説明、提示等）の工夫ができる。 ・ 児童生徒の実態に応じて、対応（注意、賞賛、活動の促進、雰囲気づくり等）の工夫ができる。 	A—B—C—D
学習評価	児童生徒の学習成果について評価する多様な手法（観察、提出物・作品、テスト等）をもっており、授業の内容や評価の目的、児童生徒の実態に応じて実施できる。	A—B—C—D
授業評価	学習評価の結果や授業記録にもとづいて、指導の成果と課題を整理でき、	A—B—C—D

	具体的な授業改善の方法を見いだすことができる。	
実践研究の力量についての評価		
計画・方法	先行実践や先行研究の知見をふまえた適切な実践研究の計画をたてることができる	A—B—C—D
研究の遂行	設定した計画にそって実践をおこなうことができ、必要なデータの収集や整理・保存ができる。	A—B—C—D
結果のまとめ	得られた結果からテーマにそった分析、考察ができ、他の実践者と共有できる形にまとめて説明することができる。	A—B—C—D
成果の活用	実践研究により得られた知見や課題から、自らの実践を改善の方策を見いだすことができる。	A—B—C—D
総合評価		
学籍番号	氏名	評定： A — B — C — D (不可)

署名

3. 成果と課題

(1) 授業実践力に関する到達目標設定の成果と課題

授業実践力についての到達目標を設定したことにより、授業の成立を支える授業実践力の複雑な要因に気づき、それらを意識しながら授業の構成や展開をすることには役に立ったのではないかと捉えている。また、授業報告票の記述から、自分の授業を振り返り、課題に気づくことや改善の方策を見いだすことにもつながっていると考えられる。

しかしながら、この基本的な授業成立のための到達目標を達成するためには、非常に多様な力量を統合して行う必要がある。その授業実践力の複雑な専門性を全ての院生に意識化させることができていない現状がある。今後、実習科目である学校実践Ⅰ～Ⅲ、「授業力基礎演習」（開設予定）をはじめとする授業科目との連携の中で、さらに授業実践力を育てる方法をさぐっていくことが課題である。

授業実践力に関する到達目標を設定するにあたり、授業実践力は教師の職能成長の中でどのように形成されていくかという全体像をどう捉えるかという課題がある。さらに、その授業実践力の形成の過程を踏まえて、教職大学院の教育実習において、どのように到達目標を設定すべきであるかという課題もある。今回、設定した到達目標は、初任者レベルの教師が身につけるべき授業実践力を想定している。したがって、一斉授業を成立させるために必要な最低限の要素に焦点をあてた内容となっている。そのため、熟達した「優れた授業」を可能にする授業実践力とのかかわりについては、さらに検討が必要である。

3. 2 学校実践Ⅳ全体を振り返っての成果と課題

授業実践力と実践研究の力量を培うという2つの目標を統合する実習を目指した現職教員以外の院生の学校実践Ⅳであったが、以下のような点が成果と課題としてあげられている。

- ① 「研究テーマ」を持って実習に臨んでいるため意欲的な実践が行えている。(授業以外の教育活動等にも積極的で、教職についての意識の高さが感じられる。)
- ② 学んできた理論を実践してみて、改めて「理論と実践の往還」の大切さを認識した様子がうかがえる。

- ③ 授業力については、さらに充実を図ることが必要。
- ④ 連携協力校の不安解消のため、極めて綿密な事前の打ち合わせが重要。 実習の目的、進め方、院生の研究テーマの説明等（学校に院生の研究テーマに対応できる教員はいるのかなどの不安）
- ⑤ 大学院教員の指導が連携協力校にも参考になるという意見を踏まえ、実習を基盤とした実践研究のあり方を追究することが双方にとって大切。
- ⑥ 研究テーマと実習指導に当たる大学院導教員との調整など指導体制に ついては今後の課題。

今後、さらに検討を重ね、実践的指導力を育成する学校実践Ⅳ（実習）の在り方を探っていきたい。

第6節 学校実践Ⅳの進め方と成果（現職教員院生の場合）

1. 学校実践Ⅳの位置と目的

本学教職大学院では、専門性と実践力を兼ね備えた教員を育成するという観点から、修了時点までに培いたい力量を備えた教師の姿として、4つの教師像（①計画者・授業者としての教師、②教科の専門性に強い教師、③カウンセラーとしての教師、④リーダー・調整役としての教師）を示し、院生は自らが目指す教師像に適う研究テーマを設定し、それを追究する中で実践力の向上を図ることを目指してきた。

学校実践Ⅳは、目指す教師像をもとに、自ら設定した研究テーマにそって実習を行い、実践研究の力量を培う“総合実習”と位置づけている。

現職教員院生にとっては、これまでの実践において直面してきた課題やさらに研究を深めたいこと等について、教職大学院の学びの中で、より高度な知見や多様な視点から理論的な検討を加え、整理し、学校実践Ⅳにおいて取り組むことにより、実践力をさらに高めるとする「理論と実践の往還」の最も大切な場の一つであると言ってよい。つまり、自らの実践とその省察を通して、絶え間なく職能成長を続ける意思と能力を養うための基盤としてこの学校実践Ⅳがあると言える。

2. 学校実践Ⅳと研究テーマ

院生は、入学試験時に目指す教師像と大学院における研究計画の概要を示すことになっており、入学後、教員の指導を受けながら、自らの研究テーマを設定（研究過程で変更可）し、これが学校実践Ⅳにおける取組に繋がっていく。

2008（平成20）年度入学の現職教員は9名であり、そのバックグラウンドは、奈良県教育委員会派遣教員が5名、本学附属学校教員が2名、休職制度利用教員が1名、学校法人派遣教員が1名（長期履修）である。2009（平成21）年度は、5名であり、全員が奈良県教育委員会派遣教員である。

奈良県教育委員会派遣の現職教員院生の場合は、各自の目指す教師像と研究テーマに基づく2年間の研修計画を、一年次の当初に県教育委員会、所管の教育委員会、所属校長に報告することとしており、教育委員会等はそれについて意見を述べるようになってきている。こうした報告は、二年次当初にも一年次の研修結果・二年次の研修計画を報告するという形で行っている。

現職教員の研究テーマは、次の通りである。

＜第一期入学現職教員＞

- ① 小学校外国語活動の指導計画・態勢作り及び授業実践に関する研究
- ② 地域に根ざした小中連携・小小連携の構築—2011年度大阪市小中一貫教育のスタートに向けて
- ③ 人間関係形成能力を高めるピア・サポートのプログラム開発
- ④ 小学校高学年における学級単位でのピア・サポート実践研究
- ⑤ 学校組織の活性化に向けて一主幹職を通してメンターとしての在り方を考える—
- ⑥ 習得と活用の一体化を目指した算数科の指導
- ⑦ 要約に着目した「言語能力表と年間指導計画」に基づく実践研究

⑧ 「学ぶ喜び」を生み出す単元づくりとその指導～小学校体育授業を核にして～

⑨ 教員に求められる能力の調査と研究

＜第二期入学現職教員＞

① 学校教育へのピア・サポート活動の導入と展開—思いやりあふれる温かい集団づくりを目指して—

② 「書くこと」の力を育成する授業作り—論理的な文章を書くための系統的な指導の研究—

③ 小学校外国語活動充実のためのカリキュラム開発—『英語ノート』の課題を基にして—

④ 児童の「説明する力」を高める指導の研究—書く活動を通して—

⑤ 体験的な授業の効果—高等学校における教育コースの活動の検証と改善—

3. 学校実践Ⅳの到達目標と活動

＜到達目標＞

カリキュラムフレームワークで求める学校実践Ⅳの到達目標は、次の二点である。

① 自分の実践を、これまでに学んだ諸理論と結びつけて分析的に省察することができる。

② 実習期間中における自分の実践の変容を明確に自覚し、説明することができる。

＜活動＞

現職院生は、二年次の4～7月に原則として勤務校で実施する。なお、研究テーマによって、適切な時期に、研究先行校等で行うことも認めている。

活動は、それぞれの研究テーマにしたがって行い、概要とその時間を実習記録簿に記入し、教職大学院教員の確認を受けることになっている。また、学校実践Ⅳにおいても、院生は、自らの具体の実践と、それがこれまでに学んだ諸理論とどう対応しているかを毎日ポートフォリオに記述することが求められる。

4. 学校実践Ⅳ実施の手順と具体的活動内容及び指導態勢

＜手順＞

現職教員院生の学校実践Ⅳは、原則として二年次の4～7月に自らの勤務校で実施するため、勤務校及び所管の教育委員会と密接な連携を図りながら進めている。

具体的には、一年次末に指導教員が各院生それぞれの勤務校を訪問し、それまでの院生の学修状況や学校実践Ⅳの趣旨・ねらい、院生に対し配慮をお願いしたいこと等について校長に説明している。

次に二年次に入り、校内人事が整ったところで指導教員は再度勤務校を訪問し、院生とともに校長と面談して、二年次における院生の学修計画、特に学校実践Ⅳの実施方法や研究成果の周知について協議している。

ここで言う研究成果の周知とは、教育委員会等の派遣教員が、その派遣の目的である「研修成果を他の教員に還元する」ことを目指すもので、本学教職大学院では、二年次に学校勤務に戻った現職教員院生が勤務校において4～7月に校内研修会、10～12月に外部からの参加者を含めた発表会を開催することを課している。休職制度による現職教員院生につ

いては、11月に学部卒院生と同一日に学内で研究発表会を開催している。

教育委員会派遣による現職教員院生の発表会には、教職大学院が県教育委員会及び所管の市町村教育委員会と連携を図り、出席依頼を行うとともに、院生が学校の実情に応じて学校評議員やPTA役員、近隣学校教員など学校外部者にも案内し、参加を得ている。また、教職大学院の他の院生にも参加を呼びかけている。

こうした研究発表会は、院生が目指す専門性や実践力が、「保護者や学校現場、地域、教育行政など、養成された教員を受け入れる側（デマンドサイド）の要請」に応えるものであるのかを考える上で、大切な機会となっており、学校実践Ⅳを進める上での刺激となっている。

＜具体的活動内容及び指導態勢＞

学校実践Ⅳとして120時間の実習時間が必要であるが、派遣による現職教員院生は、二年次に勤務校に戻って勤務しながら実習を行うことになる。

そのため、現職教員院生は、勤務校における勤務時間及び内容と、教職大学院における実践研究として位置づけられた学校実践Ⅳの時間及びその内容を区別する必要がある。

実践研究活動時間に為すことは、その日の勤務の中で、自らの研究テーマに基づく実践について、学校実践Ⅳの到達目標に照らして省察することである。さらに、教職大学院指導教員の指導を受けながら、省察した内容を改善の視点として翌日以降の実践に反映していくことが求められる。このフィードバックサイクルを築くことにより、勤務と実践研究とを時間的には明確に区別し、なおかつ、両者によって、実践と研究の往還を図る実習として意義あるものとなるようにしている。

具体的な活動内容は、各自の研究テーマに拠っているためそれぞれに異なるが、授業の実践に伴う指導案や教材の作成、授業の自己評価、児童生徒や保護者、教員対象のアンケートの整理、先行研究等の資料収集、研究テーマ実施上の課題の整理と対応方策の研究、ポートフォリオの記述など多岐にわたる。

指導態勢としては、各院生につき教職大学院の指導教員を2名とし、少なくとも一週間に一度は勤務校を訪問し、研究テーマへの取組の進捗状況などを見ながら、指導、支援を行うこととしている。

また、ICT機器による指導体制（奈良教育大学教職大学院デジタルポートフォリオ）を整え、院生に気づきや課題、発展させたいことなどを記入させることにより、教員の側から課題解決の方途や実践研究の道筋を示すなど、訪問時以外でも臨機の指導・支援ができるように工夫している。

5. 学校実践Ⅳの評価の実際

上述したように、院生は実習期間中、「どのような働きかけをして成果を生み出したのか、指導・実践の分析、その学問的意味づけ等」と「根拠資料」を整理し、ポートフォリオを作成し、デジタル化しておくことが求められる。

また、実習時間の管理は、デジタルポートフォリオと実習記録簿によって行うことにしており、院生は、学校実践に当たる活動をしたときは、「実習記録簿」用紙に、実施日時、時間、概要を記入し、所属長及び教職大学院指導教員に報告することとしている。

評価に際しては、これらの資料を基に教職大学院の指導教員が到達目標への到達度を評

価することとしている。その際、研究発表会における教育委員会の講評など、いわゆるデマンドサイドの意見も参考にしながら、客観的評価となるよう努めている。

(資料1：奈良教育大学教職大学院における研修計画書様式)

奈良教育大学教職大学院における研修計画書

ふりがな 氏 名		性 別		専攻名	教 職 開 発 専 攻	
				指導教員		
【研修目的】						
【目標とする教師像】（奈良教育大学教職大学院で設定された4つの教師像から選択）						
【研究及び活動計画】						
◇ 1年次						
◇ 2年次						
【主な履修科目】						
【成果の公表】 or 【期待する成果】						

平成 20 年 5 月 12 日

奈良県 (〇〇市・町・村) 教育委員会
教育長 宛

国立大学法人奈良教育大学
学長 名

奈良教育大学教職大学院における現職教員研修計画について (報告)

新緑の候、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。また、平素は本学の教育研究に多大の御理解・御支援を賜っておりますことに心から感謝申し上げます。

さて、理論と実践の往還を通して、これからの教育を担う、実践力を備えた教員の育成をねらいとして開設いたしました本学教職大学院は、本年 4 月、第一期生として 23 名の入学生を迎え、順調にスタートいたしました。

奈良県教育委員会から派遣いただいております 5 名の教員も、それぞれが目指す教師像を胸に、自らの研修計画を作成し、所期の目的を達成すべく、研究や学校実践など多彩な教育プログラムに着実に取り組んでおります。

本学教職大学院では、こうした院生や関係の方々の御期待に応えるよう全力をあげる所存でございますが、現職教員をはじめとする院生の研修がより一層実り多いものとなりますよう、今後とも、御指導、御協力をよろしくお願い申し上げます。

つきましては、下記の派遣教員 5 名の研修計画を別紙の通り御報告いたします。

記

(院生名)

平成21年5月7日

奈良県(〇〇市・町・村)教育委員会
教育長 宛

国立大学法人奈良教育大学
学長 名

奈良教育大学教職大学院における現職教員研修について(報告)

新緑の候、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。また、平素は本学の教育研究に多大の御理解・御支援を賜っておりますことに心から感謝申し上げます。

さて、理論と実践の往還を通して、これからの教育を担う実践力を備えた教員の育成を目指して昨年四月に開設いたしました本学教職大学院も二年目を迎えました。昨年度派遣いただきました第一期生5名においては、この一年間自ら目指す教師像に基づき、様々な科目履修、調査・研究及び発表などに積極的に取り組み、実践力の向上を図るとともに、本年度は勤務校に戻り、これまでの学修成果を踏まえて自らが追究する研究テーマを実践・検証することとしております。

また、本年度、派遣いただいております5名の教員も、それぞれが目指す教師像を胸に、自らの研修計画を作成し、所期の目的を達成すべく、日々の講義や演習、研究などに着実に取り組み始めたところです。

本学教職大学院では、こうした院生や関係の方々の期待に応えるよう全力をあげる所存でございますが、現職教員をはじめとする院生の学びがより一層実り多いものとなりますよう、今後とも、御指導、御協力をよろしくお願い申し上げます。

つきましては、下記の派遣教員10名の研修計画を別紙の通り御報告いたします。

記

平成20年度入学院生名

平成21年度入学院生名

平成 21 年 4 月 7 日

〇〇市(町・村)立□□小(中)学校
校 長 宛

奈良教育大学教育学研究科
教職開発専攻(教職大学院)
院 長 名

学校における実習(「学校実践Ⅳ」)について(依頼)

陽春の候、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。また、平素は本学の教育研究に多大の御理解・御支援を賜っておりますことに心から感謝申し上げます。

さて、本学教職大学院は、本年度、開設2年目を迎えます。院生においては、この一年間、自ら目指す教師像に基づき、様々な科目履修とともに、調査・研究及びその発表などに積極的に取り組み、実践力の向上を図ってまいりました。

二年次の本年度においては、一年次の学修内容を踏まえ、また、自らが追究する研究テーマを深める実践を行うため、学校実習(科目名「学校実践Ⅳ」)を行うこととなっております。

つきましては、□□□□(現職教員院生)の実習を、下記により勤務校である御校において実施することをお認めいただきたく、よろしくお願い申し上げます。

記

- 1 実習生氏名
- 2 実習期間 平成 21 年 5 月 日～6 月 日
- 3 実習計画 別紙のとおり
 - ① 学校実践Ⅳの課題(研究テーマ)及び実習計画
 - ② 奈良教育大学教職大学院における研修について
- 4 指導担当教員 奈良教育大学教職大学院
〇〇〇〇、□□□□

平成 21 年 9 月 日

奈良県（〇〇市・町・村）教育委員会
教育長 宛

国立大学法人奈良教育大学
学長 名

「現職教員院生研究発表会」の開催について（依頼）

時下、益々ご清祥のこととお喜び申し上げます。また、平素から本学の教育・研究に御理解、御協力をいただいておりますことに厚くお礼申し上げます。

さて、昨年度開設いたしました本学教職大学院も二年目を迎え、「専門性と実践力を兼ね備えた教員の養成」を目指し、教員・院生が心を合わせて多様化する教育課題の解決に向け、日々、研究・実践に取り組んでおります。

貴教育委員会から派遣していただいております現職教員については、それぞれが自らの課題意識に基づいて積極的に実践的な研究に取り組み、着実に成果をあげているところであります。

そのうち昨年度派遣の下記 5 名については、今年度、各自が所属する学校において、同僚教職員と協働しながら、本学教職大学院で得た知見を活かして、それぞれが抱える教育課題の解決を目指した取組を鋭意進めており、この度、ささやかながら、「理論と実践の往還」を目指したこうした取組の発表会を別紙の通り開催したいと計画しております。

つきましては、ご多忙とは存じますが、発表日には是非ともご来臨いただき、御指導賜りますようお願い申し上げます。

記

現職教員院生氏名（所属）及び発表日

院 生 氏 名

発 表 日

■ 研究成果発表会（全体会）について（案）

- 1 趣 旨：派遣教員として、教職大学院での学修の成果を広く公開し、外部からの評価を受けることにより、教員としての今後の職能の成長に役立てるとともに、学校、教育委員会、教職大学院が連携して地域における教育の充実振興を図る機会とする。

2 日 程（案）

13:20～13:40	受付	
13:50～14:35	研究授業（or研究調査報告発表）	
14:45～16:00	研究協議	
	① あいさつ（校長）	
	② 授業者（発表者）自己評価（院生）	（10分）
	③ 教職大学院における研究成果の発表（院生）	（20分）
		（内容として学位研究報告書に結びつくことが望ましい）
	④ 協議	（20分）
	⑤ 講評	（10分）
	・ 県教育委員会、地教委	
	⑥ まとめ（教職大学院指導教員）	（5分）
	⑦ あいさつ（院生、校長）	（5分）

※ 研修会の期日については、校長、教職大学院指導教員等とそれぞれ協議し、1ヶ月前には決定すること。

※ 上記研究発表会の構成、日程（時間）は目安である。各学校の実情に応じて考えること。

※ 授業を行うことを基本としながら、研究テーマが授業を行うこととは直接関係しない場合には、「研究調査報告発表」とすることも可。

教師像として、①計画者・授業者としての教師、②教科の専門性に強い教師、③カウンセラーとしての教師を選んでいる院生は、児童生徒と関わっている場面（授業等）を期待されると思われる。

3 出席者（案内状送付先）

☐ 県派遣の院生の場合

下の①②は教職大学院指導教員が依頼する。（案内状の発送も含めて）

- ① 県教育委員会（教職員課、学校教育課から各1名）
- ② 勤務校所管教育委員会（教育長）

その他の参加者は、院生が校長等と相談し決めること。

〔校長、教頭、校内教員、近隣校教員、PTA役員、学校評議員等〕

☐ 付属校の院生の場合

- ・ 副学長（教育担当）、大学の教育研究評議員（出席の案内は教職大学院が行う。）
- ・ その他PTA、学校評議員、校内教員等については、学校の状況に応じて依頼、案内を行う。

4 会場準備及び事務手続き等

学校運営上、校長、教頭等と十分協議しながら進めること。

- ・ 必要な経費は、教職大学院が負担する。
- ・ 会場準備等は学校（院生）が行う。

5 資料準備等

院生が行う。

※ 研究発表会開催のマネジメントを研修する機会でもある。